

しようか。

○河野 そう、やっています。だって、佐藤さんや三木さんが自民党の総裁が総理大臣として発言して、これを党是にするというのは誰にはわかる必要があるかと思っただけで、それをこっぴどく怒られて、おまえは正気かと言われて、正気もくそもないだろうと思っただけでも、その頃の党内には、声高に核武装論という人が結構いたんですよ。当時は、まだ国防部会の中には源田実さんとかがおられたから、再軍備論とか核武装論というのがちらちらあったけれども、それは彼が言うから仕方ないというか、それを政策の真ん中に据えようなんという気は全然なかったんです。

それでも、松野さんが最後に引き取ってくれて、タカ派の代表とハト派の代表を政調会長室に呼んで、議論の最初に松野さんが、河野君はちよつと外へ出ていてくれないかと出されて、参りました。

こっちはどんだん譲歩するだけで、幾ら譲歩してもそれでいいというわけにいかないと言ひ、もうだめだと思ひました。

○紅谷 翌年の党大会では、その政策綱領はどうなったのでしょうか。

○河野 次まで繰越しになるんです。結局、三年後に政策綱領の改正というのをやりました。僕は離党していなかったけれど、そのときに政策綱領改定委員会とかというのがあって、委員長は井出一太郎さんでした。井出さんだったから誰も文句を言わず、やはり人徳というのはどうしようもないと思ひましたね。井出さんが報告して全く異議なし。信用があるのとなじや、かくも違うかと思ひましたよ。

自民党って人なんです。だって、政策綱領の中身なんて誰も読まないで、あの人がやるからいいだろうという話ですよ。

今の憲法改正だって、国民投票に付したら、誰が提案者かによつて通ったり通らなかつたりすると思ひます。だから、やつたらしい、

今だったら絶対通らないから。

○紅谷 自民党の新政策綱領の策定に関わられたのが昭和五十年の秋で、その翌年の六月には自民党離党を表明されるのですが、やはりこの件で相当ダメージを受けられたのが、きっかけになったのでしょうか。

○河野 そうでした。こたえました。これはもう自民党には私のいる場所はないなとときに思ひました。

文教部会の仕事は、私学振興法がいいところまでいっていたから残念だったけど、一方で、ロッキードの裁判が進んでいたから、もうそれどころじゃなかった。

五十一年の十一月が衆議院の任期満了で選挙だったんです。僕が六月に離党すると言つたら、みんなから止められ、松野さんからは夏にはロッキードの白黒がつくから、それまで我慢して、それでだめなら離党しろ、俺も一緒に出てやるから、それまでは俺に身柄を預けるとさんざん言われました。

松野さんには、ありがたけれども八月の判決まで我慢したら、任期満了の選挙まで数カ月しかなくて何もできません。新党を作ろうと思つたら、選挙までに新党の周知徹底をして、候補者を集めてお金を集めなくてはならないから、もうぎりぎり、これ以上延ばせないんですと言つたんです。

松野さんには、政策綱領のときに、すごく世話になり、僕をかばってくれた恩義があつたけれど、これだけはだめですと言ひました。

《自民党離党と新自由クラブ結成》

○紅谷 新自由クラブの結成は昭和五十一年六月ですから、もう四十年以上前になりますが、松野政調会長から依頼があつた自民党の政策綱領の策定作業の挫折が、いつまでたつても変わらない自民党

からの離党の核心の一つになり、その直後に起きたロッキード事件が、離党の引き金になったと述懐されています。

そこで、まず離党という大きな政治決断に至った経緯と、新自由クラブの政治理念について、お話ししたいと思います。

○河野 少し脱線して、後ろに戻ってから話をさせてもらいます。

父が死んで、父の後援会が強烈で、どうしても後をやれというので担ぎ出されたのですが、私は当初、政治をやる気、政界に入る気はなかったんです。

大学を出て商社勤めはとても快適で、その商社を途中で辞めて小さな会社の経営に関わるようになっていたけれど、政治をやるという気持ちよりも、商売、経済界で働きたいという気持ちがあったんです。その頃は父が政治をやっていましたから、余り父の迷惑、足手まといになってはいけないということもあって、少し避けていたんです。

父が死んで、後をやれと急に言われて非常に躊躇したんです。なぜかという、政治家である父の横にいて、出入りするたくさんの政治家を見ていたけれど、その政治家をどうも好きになれなかったんです。それは、自分の選挙のためにこういうことをやりたいという陳情が多かったり、話を聞いても余り天下国家を論じたり、こういう政策が必要じゃないかという話はあまりなくて、それよりも選挙区事情を話したり、自分の利害に関することばかりでした。それは、先輩政治家のところを頼みに来るのだから、今にして思えば当然かもしれないけれど、そういうことばかり言うものだから、政治家という人種について余り好感を持っていなかったんです。

はっきり言って、政治家には二種類ある。天下国家を論ずる政治家と、全く地元優先の政治家との二種類あるというふうに僕には見えていたんです。

しかし、父が死んで後をやれよと言われたときに、果たして自分が政治家になってそのどっちになるのだろうか、とても前者の方にはなれる知識も能力もないし、かといって後者ではつまらないという気持ちがあったから、非常に逡巡していったんです。

だけれども、その後先輩の政治家に会って、偉い先輩の政治家が僕のことをとても心配してくれて、松村謙三さんや池田総理とも父が近かったものだから、葬儀が終わった後にお礼に行くと、君はどうするんだと言われて、躊躇している場合じゃないだろうと言われてました。人によつては、慌てるな、立ちどまって考えることも大事だと言ってくれた人もいたけれど、おおむね強い勧めで、自分どうしようかと考えている間もなくやらざるを得ないというふうになり、引きずり込まれたような格好だったんです。

何も分からないから、党本部に通って毎朝の部会や先輩政治家の集まりや、誘われて夜の会合などに参加してみた。でも何処に行っても本場の国政、現下の政治問題を議論するのを聞いた事はなかったんです。それで政治に嫌気がさして来ていました。

そう思っていた時に石田博英さんに出会ったんです。前にも話しましたが、石田さんは中央公論に論文を発表され、それが党内で若干問題になって石田委員会ができ、僕もメンバーに入ったんです。

この石田委員会に入れてもらった事が私の政治家人生に大きな方向性を与えてくれました。終戦後の日本がどう進んでいくか、これまであまり深く考えていなかったいろいろなことに、進んで行くヒントを得たのは、振り返ってみるとこの委員会でした。

そこは宮沢さんや松野さんとかの政策通の人が、日本の現状と未来について議論していて、私には物を言う能力もキャリアもないから黙って聞いていたけど、そこで憲法の問題や非核三原則の問題なども議論されて、僕は自民党に来て良かった、初めて政治家になって良かったという気がしたんですよ。

そこでの答申案は、誰かの引き出しに入っただまお蔵入りになつてしまうのですが、そのときの意見が僕には非常に新鮮で受け入れられるものだった。それが頭にあつたものだから、松野さんから政策綱領策定に関わってみないかと言われたときに、あの時の議論を少しでも反映できればいいなという気持ちがあつて受けたんです。それで、その議論を一生懸命並べて作った案からは、憲法問題は抜けていたし、自民党が後生大事にしていたものをみんな落としていたので叱られたんです。加えて、ちよつと生意気だと思われていたんだね。

それでも少しづつ案を固め、いいと思つて一生懸命作った案を親委員会へ説明に行ったけど、何回目かでやはりこれはだめだなと思ひましたね。あのときは、自由主義政党というのは自民党しかないし、その党だと思つてきたら全然違うから、ここは私のいるところじゃないなという気がしていた。しかし、この党以外に行く先はどこにもないわけで、それがだんだん高じて、それならもう自分で作る以外にないという気持ちで芽生えていったんですよ。

だけれども、先輩で僕のことを見てくれた人がいて、おまえ、自民党の中で何を言つてもいいが、離党ということだけは絶対言つちやだめだとくぎを刺されたんです。

実は、そのときまでは余り離党という気はなかつたんですよ。それが、逆にああそうか、離党という方法があると気がついたので、しかし、他の人に離党しようとする誘いをかけるなんて事は怖くて言えなかつたですね。そういう時間が何カ月か続いているうちに、ロッキード事件が起きるんです。

それまでの間は、ここにはいられないけど行く先はない、どうするか、こんなことでもいいのかみたいな話はみんなにずっとしていったんです。当時は文教族で文教部会にいましたから、西岡武夫さんとか藤波孝生さんとか、そういう人たちとずっと話をしていました。

そこにロッキード事件が起きて、これはもうこの党にいたらだめだと。それに共感してくれた人たちの中には、こんなところにいたんじゃないや選挙で当選しないという人もいたんですよ。僕はそう思つていなかったけど、人によつては、自民党じゃ選挙にならない、みんな落選するから新しいものを作らなきゃいけないと。変えようといつたつてもう変えようがないから、段々に新しいものを作らなきゃいけないという気持ちになつていきましたね。

○紅谷 それは、具体的には離党ということ、西岡さんや他の誰かと相談されたということですか。

○河野 ロッキード事件でコーチャン証言とかがあり、党の中核の人たちが容疑を受けて、毎日のように新聞に大見出しで出るわけです。あれを見るたびに、ああ、もうだめだと思つていましたね。

それで、朝飯会の文教部会が終わつてみんな帰つた後、四、五人が集まつて、最初は幹事長室へ言いに行こうとか、総務会に出て何か言おうとかと言つていたけど、幹事長は中曽根さんで、総務会長は灘尾先生だからおつかないし、中曽根さんはむしろ逆の方でしたからね。そう言つていけると、部会の席で参議院の有田一寿さんが、僕はほとんど知らない人だったので、河野さん、こんなことじやとてもだめですよという話をされたんです。やはりこういう人がいるんだなと思ひましたね。

あとは、田川誠一さんですね。田川さんも、これはとてもだめだけれど離党だけはだめだと言つていたんです。それが最後のころは田川さんが一番強硬になつたんですよ。

ロッキード問題が本当に深刻になつて、西岡さんと話をしたら、党内で徹底的に何かやる以外にないけれど、それでだめなら離党するしかないかもしれないと彼も言つたんです。

ただ、最初は大勢がそうだとおっしゃっていただけで、いざ本当にやるかとなると、みんな躊躇したんです。離党しかなかったのは三

木派の人が多かったんです。三木派は、そのころから党内では一番最小で弱小派閥だったから、割と批判的な意見を言えるグループだったんですね。

○紅谷 しかし、当時は三木総理で、西岡さんや山口さんは三木派だったのではないですか。

○河野 そうなんです。だから三木派が離党すれば三木さんの足を引く張ることになってしまふ。

ほかに塩谷一夫さん、坂本三十次さん、菅波茂さんとかみんな三木派だったんですよ。塩谷さんなんか、三木の足を引く張るわけにはいかないから、河野さんの言うとおりで、ここは三木を守って、三木がだめになったら離党するという感じでした。

それから、他の人たちを誘うと、離党はいいけど何人離党するのか、三人や四人じゃ全然問題にならないから、二桁離党するのなら一緒にやってもいいという人が多かった。

田川さんも、俺は十人目の離党者になると言うんです。九人探してくれば十人目は俺が名前を書くから九人探してくれ。今はおまえと俺と二人だから、あと八人探さなきゃいかぬというので、それから離党者を探し始めたんですよ。

ところが、これが難しく、新聞に書かれたらおしまいだから、口が固そうで真剣に考えてくれそうでとか条件がいろいろあったけれども、それでも一時は十五人ぐらいはいるんじゃないかなと思っていた。その中には参議院議員だった細川護熙さんもいて、当時は大蔵政務次官で、僕が大蔵省に行つて話をしたら、是非行つてもいいと最初は言っていたんです。

参議院では有田さん、細川さん、秦野章さん、まだ二人ぐらいいましたね。参議院で五、六人、衆議院で十人近く、全部で十五、六人にはなるんじゃないかなと思つていたんですよ。

ところが、いざとなつたら、やはり選挙に自信のない人はできな

いんですよ。それから後援会が強いところはだめで、静岡の大石千八君は、NHKのアナウンサーをやっていたとても優秀な人で、彼もこのままじゃ絶対だめだという武闘派のハト派だったけど、最後はどうしても後援会長がいいと言つてくれない。静岡というのは自民党の組織がすごく強いところなんです。大石君は、泣く泣く離党はできないけれども会合にはずっと出ますからと。そういうのもうれしいような困つたような。塩谷さんも同じで、彼は余り選挙が強くなって、やはり後援会に振り回されるんです。

結局、あれもだめこれもだめで、どんどん減つて六人になったんです。

○紅谷 それでも藤波先生は来てくれると思つていらしたんですね。

○河野 彼だけは最後まで絶対来ると思つていた。だから、彼が来ないのが僕にとつては最大の読み違いです。みんなも藤波さんは来ると思つて数に入れていたから落ち込んだね。発表前日の夜、伊勢まで行つて藤波さんと話し合つたけど、なぜか途中からだめだと言ひ出したんですよ。この人は何をすることもとても慎重な人だった。僕とは相当固い契りを結んでいたけど、だめだったね。彼が来てくれていれば、僕と西岡さんとの意見の違いは取り持つてくれたと思うんです。彼が来てくれなかったのが最大の誤算だし辛かつたね。

○築山〔衆議院事務局〕 離党後も藤波先生の集会に行かれたようですが。

○河野 そうなんです。仲がよかつたから、離党以前から約束していた彼の後援会の総会に来てくれと言つたので行つたら、田川さんにそんな甘い態度でやるなら俺もついていくのを考えるときんざん怒られたね。確かにそうだよ。飛び出して自民党批判をやっている中で藤波後援会に行つたら、そこに中曽根派の代貸しのような存在だった稲葉修さんが来ていてぼろくそに言われた。この人は僕をと



でも可愛がつてくれていたものだから、言いたい放題言われたよ。今まで養殖の池で飼っていたのが、偉そうな顔をして川へ飛び出して川を下って、戻ってくるわけがないだろうと言われました。

それから、三木派の菅波茂さんという福島県いわきのお医者さんで、とてもいい人だった。この人も、俺はいつでも政治行動をとむにする気持ちはあると言っていたけど、結局、三木に言われて断念するしかないということだった。

○築山〔衆議院事務局〕 三木総理は、ロッキード事件を責任を持って解明すると言われ、三木派は党内改革を目指していたけれども、周りが三木おろしに走って、そこが一番嫌気が差したところでしょうか。

○河野 それはもちろんありますね。離党すると言ったら菅波さんが来て、洋ちゃん、一緒に行かなくて悪いけど、頼みがあると言うから何だと言ったら、離党する前に三木のところへ行って二人で話をしてくれと言うので、離党声明を出す前に会ったら、三木さんから、君の言ったとおりには僕はしているのになぜ支持しないんだ、逆に足を引っ張ることになるじゃないかと言われて、ちよつと辛かったです。

離党に際しては、三木さんと松野さんが一番参りましたね。不思議なことに、三木さんを一番支持して支えたのは松野さんなんです。松野さんは佐藤派で、佐藤派は三木の足を引っ張って三木降ろしをしていたのに、松野さんだけは一人で三木さんを支えていた。

僕は中曽根派にいたけど、中曽根さんというのは薄情で、幹事長なのに全然止めないんです。どうしても出るのかと言うから、出ますと言うと、じゃ、命ある限り踊りたままとか何とか言っていた。政治家というのは毀誉褒貶があるから、この後に話しますが、西岡さんとの話で、彼は自民党基盤政党論で、自民党の改革をやるので自民党に戻れと。僕は保守二党論だから、もう一つの保守をつく

るんだと論争になって、それで別れて復党しちゃうんだ。けれども、それから十年もたないうちに、今度は僕が自民党に戻って、彼が自民党から出て行って二党論の方へ行く。そんなことばかりだったな。

僕は、三木さんとはよく会って話をして、阿波戦争の時には徳島へも選挙応援に行っていましたよ。

○紅谷 三木さんと後藤田さんの対立ですね。

○河野 後藤田さんが選挙に出たときに、三木さんに頼まれて反後藤田で散々やったんだ。それが最後は後藤田さんと一番仲良くなっただから、わからないものだよ。

離党する前に、椎名裁定があつて三木さんが総理になるんだけど、その直前までは総裁選をやるというので、今度は自分たちで候補者を担いで戦えという話になって、それで、宮沢さんと石田博英さんと藤山愛一郎さんの三人に手を挙げてと頼みに行つたけど全部断られた。それで、誰も担げないなら、おまえがやれと仲間から言われたときに椎名裁定が出て、三木さんになるわけです。

それまで、椎名さんというのは自民党の老害の象徴なんて言っていたんだけど、僕が引退してからだけど、国会図書館で椎名さんの回顧録を読むと、あの人も自民党改革を一生懸命考えて書いているんですよ。それは僕らが言っているよりよっぽど積極的な党改革案で、老害なんて言わないでこの人を担げばよかつたと思つた。本当に目先の印象や知識で走って随分失敗しているよね。

○紅谷 今の椎名先生の話は私もお聞きしたのですが、自民党には、当時なかなかそういうことを表で言えない雰囲気があつたのでしょうか。

先ほどの政策綱領についても、瀬戸山三男先生が賛意を表されたようですが、自民党の中でもタカ派的な印象で、とても示された案に賛成されるような方じゃないと思つていました。

○河野 そういう雰囲気がありました。瀬戸山さんはタカ派で、頑固な老人という感じの人でしたよ。だから、瀬戸山さんからの手紙はすごく嬉しかったですね。

○紅谷 話に戻りますけれども、新自由クラブ結成に当たって、結局、藤波さんや大石さん、塩谷さんも、それから竹内黎一さんも最後には加わらなかったのですが、今は離党できないけれども後から新自由クラブに加わるという話はなかったのですか。

○河野 全然なかったですね。マスコミはあと何人来るとかいろいろ言つたけど、僕は、自分で一人ずつ当たってみて、もうこれで終わりだ、後は選挙が増えるかどうかだと思つていました。

しかし、選挙がなかなか辛かつた。さっき言つたように、大石千八さんとは永原稔さんを当選させたことで、後で大石さんが来るという可能性が無くなつたような格好でした。竹内黎一さんのところも木村守男さんを立てて、竹内さんから俺のところまでやるのかと言われて困つたけれども、自民党は全選挙区に出ているわけだから、どこで立てたつて誰かとぶつかるんですよ。

○築山〔衆議院事務局〕 大石武一農林大臣はそれで落選したような感じになつたのですか。

○河野 ええ、そうでした。菊池福治郎さんという人を立てて、大石さんは現職の農林大臣だったから絶対当選すると思つていたら落選して、大石さんに怒られたよ。

○紅谷 その後何年かたつて菊池さんは自民党に行き、大石さんは新自由クラブに来るのですね。

○河野 そうです。大石さんが来てくれてね。だから、わからないんですよ。でもそういう動きが小選挙区制になつたら完全になくなりました。一人区だから、入りようもなきや出ようもないから、なく力性があるというか、複数区だから有権者も一人ぐらいそういう保

守がいてもいいじゃないかみたいなことになるけれど、一人区じゃ絶対そうならないからね。

○紅谷 その後、新自由クラブとして選挙を十年ほど戦われますが、中には、自民党で公認されないから新自由クラブでという人もいたのではないですか。

○河野 最初の選挙のときに、候補者を絞るかどうかで党内で相当議論したんですよ。山口君が選対委員長で、しきりに二十五人は絶対出さなきゃ選挙はできないと言う。

一方で、田川さんと有田さんは、候補者は少なくともいい。絞って本当にいい人だけ立てればいいので数は要らぬと言うけど、山口君は選対の責任者だから山口案になって、二十五人出そうというけど、最後の五、六人は誰でもいいから担いで立てろみたいな話になってしまった。それがまた、マスコミはわかっちゃいなくて、候補者は何ぼでもいると思いついてるけど、実際は探して歩くけれども、なかなか見つからないんです。

選挙運動の基本なのに、明らかに自民党でいつでも自民党へ帰っちゃうだろうという人もいましたよ。中曽根さんの秘書のまま出てきて当選したけれども、最初から自民党的な言動でしたね。

○紅谷 話が藤波先生に戻りますが、私が河野先生の藤波先生に対する思いを感じたのは、藤波先生の訃報を聞いたのが広島へG8下院議長会議の下見に行っていたときで、帰りに、宇治山田の御自宅へご一緒しましたが、わざわざ行かれるんだなあと思いましたね。

○河野 そうでしたね、行きました。一番大事なときに一緒にやなかったけど、一番好きなタイプだったんですよ。

最後は中曽根さんに抱え込まれちゃったね。中曽根さんも藤波さんを随分大事にしていたから、何事もなければ、恐らく中曽根さんは藤波さんに後をやらせたかったんだと思う。

○紅谷 新自由クラブ結成までにはいろいろなことがあったと思いますが、その中でも、お父様の河野一郎先生は保守二党論を掲げて新党結成寸前まで行かれましたが、結局は松村謙三さんや大野伴睦さんの説得で断念されたということがありました。

○河野 そうです。父は何度か自民党の総裁選で苦汁を飲まされた。自分が出なかつたけれども誰かを担ぐわけですよ、鳩山さんを担いだり、岸さんを担いだり。なぜ岸さんかという、鳩山内閣のときの幹事長が岸さんだったから、鳩山さんが死んだ後は岸さんを担いだ。

だけれども、終わった後で僕に、俺の政治生活の中で岸を担いだのが最大の失敗だったと言っていた。彼とは人生観も違うし、結局はやはり戦犯なんで、ああいう戦争をした人を担いだのはやはり良くないと言っていた、そのときは一生懸命岸さんをやったけど、石橋さんの二、三位連合に負けて挫折するんです。

そんなことがあって、もう自民党の中で人を担いで総裁選なんかをやるのは嫌だから、自前の党をつくって政治に関わった方がいいというので、相当深刻に考えて保守二党論を掲げるんです。

軽井沢で派閥の勉強会をやって、あのころの派閥の勉強会は三日ぐらいやるんです。そのときに、政治評論家の藤原弘達さんとか細川隆元さんが講演するんだけど、その人達が何も知らないで保守二党論というのもあるんだと講演するんです。その後で父が二党論を選んで離党すると言うので、二人はびっくりしてあれはあくまで理論であって、やるべきでないと言って止めるんです。

だけれども、その軽井沢で勉強会をしている間に、父は腹心の森清さんと重政誠之さんに言って、新党に参加するかどうかをみんなに確認して、場合によっては判こをつけてこいみたいな話で、二人がその勉強会の合間ずっと走り回るんです。当時、春秋会は三十人ぐらいいたけど、それまでいいぞと言った割には、いざとなると、

やはり選挙区事情もあるのかなんとかといって、判こをついたのは十人ぐらいいいかいんですよ。

それで、森さんも重政さんも、これはちょっと慎重に考えた方がいいということになって、そこで父は孤立して物すごく窮地に立つけれども、何人でもいいからどうしてもやりたいというんです。

そうすると、当時、春秋会の中の長老格で後に議長をやられた山口喜久一郎さんなどが反対で、もうちよつと我慢すればチャンスが来るんだからと一生懸命止めに入るけれど、父は我慢できないんですよ。とうとう固まらずに勉強会が終わって、みんな松村さんのところへ行ったり大野さんのところへ行ったりして、止めてくれと頼みに行くわけです。

その反面、河野新党論が出たら、佐藤派は出て行ってほしいと喜ぶんだ。新聞なんか引越しの荷物ぐらい一緒に作ってもいいみたいなことを書いて、それでまたこっちはかつかとす。

それで、にっちもさっちもいなくなるんだけど、松村謙三とか大野伴睦という人がわざわざ家に訪ねて来たり、それから松村さんのところには父が訪ねたのかな、その二人はすぐく父のことを心配してくれていて、今やっちゃだめだ、君の時代が絶対来るから待って止めて止めるんですよ。それで、結局最後は、やめるんです。

あの頃は、友情とか政治家同士が説得したり慰留したりというのがあったね。僕るときは、ほとんど慰留なんかなかったものね。僕の新自由クラブのときは、本当に涙が出るほど慰留したのは松野頼三さんで、この慰留には困ったね。それから三木さんは総理大臣だったけど、三木さんの家で説得された。それと、ある意味で石田さんですよ、余り無理しない方がいいんじゃないか、それでもやるなら大いにやれとかという話だった。

父が保守二党論を途中で挫折したということがあったから、おまえが頑張ったんじゃないかと言う人もいる。そうでもないんだだけ

ども、そのころから二党論というのがあるんだという思いがあったことは間違いなく、やはり一つじゃだめだという思いがありましたね。

有権者が選択肢を持つのが選挙ですよ。しかし、自民党がダメだから社会党というわけにいかないから、もう一つの保守があると受皿になると思ってやっただけです。一回目の選挙では、やはり物すごい受皿になり、その受皿は何かというと、結局、共産党に行く票をみんな獲ったんです。僕らは十何人に一遍に増えたけど、その数だけ共産党が減ったんですよ。

でも、次の選挙では今度は共産党が増えて、こっちが減ったんです。それは、こっちが当選したときに、共産党はみんな次点だったから頑張ったんですよ。次は僕らがみんな次点になった。

あの前は、政治不信があつて共産党は四十議席になったんです。それでロッキードになって、共産党は百ぐらいいくかもしれないと思つたこともあるんです。それは、自民党票が流れ出すと、社会党は中途半端で受皿にならないから、共産党までいってしまうのではないかというので、僕らはその自民党から流れ出る票を止めなきゃだめだというのでやっただけ。そういう意味では一回目の選挙は成功だった。それは、新自由クラブが増えたということがさることながら、保守票が共産党まで行かずに止めたというのが成功だったと思えますね。

○紅谷 当時の共産党は、国会で委員長を取っていましたが、理事にもなつていたので、それなりの存在感はありました。

○河野 もし新自由クラブをつくらなかったら、共産党はもっと地歩を大きく固めたかもしれない。共産党もそのつもりで候補者もたくさん出すし、勝つつもりでいたんだ。あの頃は、こんなに右傾化する政治になるなんて、思いもよらなかったからね。

《新自由クラブの選挙活動》

○紅谷 いよいよ初めての選挙になりますが、新自由クラブは、衆議院議員が五人と参議院議員が一人の六人で結成されて選挙に臨みます。選挙になります、政治資金、組織、それから候補者の問題もあり、選挙活動は大変だったと思います、いかがだったのでしょうか。

○河野 やはり一番はお金でしたよね。今のように政党助成金はないし、離党しようといつて集まったけど、数は減って六人になって、六人で離党した後どうするかという相談をしかけたら、西岡さんから金もなく無手勝ていくのは無責任じゃないか、金の準備はちゃんとできているかと相当厳しく言われました。しかし、そのときお金なんかありませんよ。借金する以外にないと言ったら、借金で政党を作るのは無責任だ、二億や三億の金を準備してもらわなきゃ新党なんてできっこないと、西岡さんはとても慎重だったんです。

それを、まあまあといつてみんなで抑え込んで、財界出身の有田さんが、河野さんと一緒に金づくりはやるからと言って引き取ってくれて、だから有田さんは、離党の最後のところでは物すごい存在感だったんですよ。ぐずぐずしている人を捕まえて、とにかくやりましょうと、「愚直にやりましょう」と有田さんが言われて、それで愚直という言葉があつた頃の新自由クラブのキーワードになるんです。有田さんはクラウンレコードの社長だったから一人で財界人を回って、お金もある程度手当てしましたと言ってくれた。僕は責任があるから、自分で銀行から数億の借金をして準備しましたね。

離党してから選挙まで半年ぐらいたったが、その間はお金がないんですよ。第一声を小林正巳さんの地元の兵庫県の明石でやろうというけど、そこへ行く宣伝カーもない。それで何十万かでレンタカーを借りましたね。看板かけて色塗って、辛うじて明石に間に合っ

たんです。僕らの選挙というのは、とにかく叫ぶ以外には武器が何にもないわけで、車とマイクロホンがなきゃ選挙はできないから、とにかく車を一台借りて、明石で始めた。

そこからは、行く先々で全く自然発生的にボランティアが募金してくれるんですよ。それで募金箱を急遽作って、一日に三十万ぐらい集まったりしたね。

○紅谷 自民党の金権批判をしていただけですから、個人からの寄附を基本と考えられたのだと思うのですが、そのカンパの箱というのが憲政記念館に寄贈されていたので見てきましたが、いかにも即席で作ったという印象の、とても小さい箱でした。

○河野 新自由クラブの形見の品一式を憲政記念館に寄贈したんです。

個人からの寄附だけで賄うのはとても難しかったけど、我々の主張があつたので、金の処理だけは物すごく神経を使つたんです。有田さんがそこは全部やってくれることになって、すごく苦労されたんです。

一年たつて初年度の政党の決算報告をするのだけど、誰から幾ら集めて何に使ったかというのをメディアはみんな見ている、詳細に出せというんです。企業献金は一切しないと断っていたけど、企業からの金をもらわなきゃ一定の額は集まらないんですよ。百円、二百円の金を幾ら集めても、それは三百万、五百万は集まるけれども、やはり一千万、二千万は出ていってしまうわけですからね。

それで、企業献金ゼロは無理だという話になって、これがまた党内で大論争になって、そんなこと言つたって実際問題無理だから企業献金をもらおう、もらうけれども一定のルールを作ってもらわなきゃいかぬ。正確には忘れちゃいけないけれども、全体資金のうちの企業献金が半分を超えない範囲でもらおうと。そうすると一千万を企業からもらうためには、一千万を個人献金で集めなきゃいけないわけ

で、なかなか大変ですよ。

○紅谷 当時、ソニーの盛田社長がジェット機を提供してくれたという話もあったようですけれども、財界として応援するというわけにはいかなかったのですか。

○河野 そうはいかないから、応援してくれたのは財界主流の人達ですよ。一人は牛尾治朗という青年会議所のボスで、若手の財界人を集めてくれて積極的に応援してくれた。その中から佐藤敬夫さんが出てきたんです。佐藤敬夫、小坂英一の二人は青年会議所の中では一番優秀な人材だと思って担いだんです。

それから、盛田昭夫さん、梁瀬次郎さん、堤清二さんといった人たち。

盛田さんは、金を出せといつたってなかなか出せないから、飛行機を使っていいよと言ってくれたけど、当時はジェット機が降りられる飛行場がないから、一回か二回使ったかな。貸していただいたものの使い方がなかなか難しく、でも、とてもありがたかったですね。

ヤナセ自動車の梁瀬さんという人は、本当に涙が出るような人だったね。後に僕が小平さんを担いだときにも、自民党へ戻ったときにも批判されたけれども、梁瀬さんだけは、洋平君がどこへ行こうと俺は君を応援する、何でもやると言ってくれた立派でありがたい人でした。この人が一番そういう意味ではファンでいてくれたね。

○紅谷 私は、新自由クラブが結成された時は学生でしたが、当時、これは参議院選挙の話ですが、五当四落というふう言われて、五十年代初めの大卒初任給が十万円にもいってない頃ですから、五千万も出さないと当選できないのかと思っていれば、五千万じゃなくて五億だということです。四億じゃ落選、五億出さないと当選できない、そう言われていました。あの頃の選挙はむしろ金がかかる選挙

○河野 そうでした。あの頃の選挙はむしろ金がかかる選挙

をやっていたんですよ。それを僕らは全く金のかからない選挙をやるとういうわけだから相当無理があつて大変だった。本当に武器は車に乗って叫ぶことだけで、ほかに何にも選挙運動のしようがない。だから、工藤晃君が横浜で当選したけれども、彼は、最初から最後まで録音テープに僕が声を吹き込んだのを車で流し続けて、彼はそれで当選しちゃったんだ。しかもトップ当選だからね。

あのとき、神奈川県一区から五区まで五人立てて五人とも最高点で通ったんですよ。工藤晃さん、川合武さん、甘利正さん、田川誠一さんと僕と。そんなことは後にも先にも一回だけだったけど、相当地なブームでしたよ。

○紅谷 当時の企業献金に関する新自由クラブの方針は、個人献金を主体とするけれども、節度を持って企業の献金を期待するでした。

○河野 そんな言い方しか出来なかったんですよ。それも党内ではさんざん議論して、本当は企業献金は止めるだったんだけど、しようがないということだった。

○紅谷 ご自分でも数億の借金をして結党の資金を作ったというお話でしたが、お父様から引き継がれた会社はどうされたのですか。

○河野 潰しちゃったね。自民党の代議士を四十年やったら、大体東京近辺に家を持っているよね。僕は自分の家も父の家も全部売っちゃって、いまだに一軒もないんだから。まあ、あれだけのことをやったんだから、しようがないよね。

○築山〔衆議院事務局〕 「私の履歴書」には、最初の新党結成の資金を先生が負担されて、結構最後まで悩まされたと言われており、随分苦労されたようですね。

○河野 本心に、借金しましたからね。それで、ちょっと党勢が落ちると、貸した方は本心に返すか返すかと来るんだ。勝っているときは黙っているけど、一回置きに勝ったり負けたりしたから、ごそつと負けたときには、貸した方はみんなびつくりしたんだよね。

やはり政党というのは、選挙で戦って勝たなきゃだめなんですよ。特に我々は選挙で有権者の支持を得て議員を一人ずつ増やすしか方法がない。新自由クラブ十年の間に衆議院選挙と参議院選挙を九回戦ったから、毎年のように選挙をやって毎年のように金の苦労だったね。

金がなかったからマイクで叫ぶしかない。だから、みんな演説はうまかったよ。山口敏夫君なんかもうまかったね。新自由クラブの第一声を西明石の駅前で行ったら、ちょうど雨が降ってきて、トップバッターの山口君がやるのを聞いていたら、巨人、阪神戦は雨が降ったら止めるけど、我々は雨が降っても止めないとか言っただけなんだ。だから、幾ら降ったって止められなくなつたよ。

○紅谷 京都市役所前での加地和さんの応援では、暴漢が選挙カーに上ってきて、危機一髪だったようですね。

○河野 本当に危機一髪でしたね。あの頃は、今週は新自由クラブがどこで演説するからと週刊誌が書いてたんですよ。だから、どこへ来るかわかるから待ち構えているんですよ。ホテルを出て、歩道を歩いて渡った市役所前の角でした。加地君が暴漢を羽交い締めしている写真があつて、僕が写った後に加地さんの顔があるのを選挙ポスターにしたんだ。選挙ポスターに二人も三人も顔が写っているのなんか珍しいよね。

加地君は京都市会議員で弁護士でした。自民党を離党して、行き先は決めないで、無所属でやるつもりでいたんですよ。

《新自由クラブの立ち位置》

○紅谷 新自由クラブの最初の選挙は、昭和五十一年十二月の衆議院選挙で、結果は十八人の当選という大躍進で華々しいスタートでした。選挙後に初めての通常国会を迎え、予算や法案の審議に入っ

ていくことになりませんが、新自由クラブは一体どういうスタンスで臨まれるのか。選挙で自民党は思いのほか減らず二百六十という数で、過半数は確保しましたが安定多数というだけで、予算委員会は逆転委員会でした。そういう状況ですから、自民党は新自由クラブがどういふ姿勢で臨むのか、また、野党の方も非常に気になっていた存在でした。

そういう中で、昭和五十二年二月に、新自由クラブとして、河野代表が初めて本会議で代表質問に立たれました。その中で、自民党に対しては時代的役割は終えたと言い、野党に対してはイデオロギ―から抜け切れない既存の政党と断じておられます。

そこで、新自由クラブの国会対応がどうだったのか、そのメルクマールが予算への賛否かと思えます。昭和五十二年から昭和六十一年までの間、最初の予算には賛成されました。その後は賛成もあり反対もありで、連立になれば当然賛成することになりますが、新自由クラブは、国会にどういふスタンスで臨まれたのかお伺いしたいと思えます。

○河野 この頃の政治情勢、バックグラウンドをちよつと説明しておくと、昭和四十七年の選挙で共産党が大躍進して相当な議席をとった。総選挙での大躍進と同時に、地方の首長でも共産党が知事選でも勝つんです。

全国の主要な知事でも、共産党若しくは共産党が関わる人が知事になるといふことで、自民党の心ある人は相当危機感を持っていたんですよ。

ロッキードに象徴されるスキャンダルが出てきて、もう次の選挙では共産党に相当やられるんじゃないか、自民党票は社会党に行くかもしれない。つまり、自民党がだめということになると、途中の受皿がなく、社会党に行くか共産党に行くわけです。

僕らはそう考えていて、国民は自由主義社会、自由主義経済体制

というものを評価しているにもかかわらず、政治がちゃんとしていないと自由主義社会を進めていくような政治ができない。つまり、自由主義政党というのは自民党一党しかなくて、この党がスキャンダルにまみれて票が逃げると、一遍に社会党や共産党に行く可能性があるというのを、僕は相当深刻に危惧していたんです。そうしているところへロッキード事件が起こったものだから、これはいかぬというのが離党の発端でした。

○紅谷 昭和四十七年の選挙で共産党は三十九議席に増やし、加えてロッキード問題となると、更に増えるのではないかと思われたのですね。

○河野 ものすごく増えて、次は相当いくだろうと。だから、共産党は自信満々で次の選挙に臨む、そういう状況だったんです。

それで今の質問で、予算のところを答える前に選挙のことだけ言おうと、そこで僕らが離党して、自民党でない保守政党を作ったものだから、そこにまた一種の日本人的感情で、新自由クラブいぞぞということでブームに沸いたものだから、自民党から逃げた票が共産党へ行かないで、みんな第二保守党の新自由クラブへ落ちたわけです。共産党は、絶対来ると言っていたのが、新自由クラブに全部ひっかかっちゃった。その証拠に、新自由クラブが大躍進して十八議席とったときに、共産党は十九議席で、多くが次点で落ちているんです。だから、宮沢さんはとても心配していたけど、君が頑張ったから、共産党へ行かずに自由主義の最後のとりでを守ったと言いました。

党を離党するというのは大変なエネルギーが要るんです。最近の人は離党届をぼんと出して離党していくけれども、あの当時、僕は本当にへとへとになったんですよ。

それで、離党できたというのでほっとするんだ。それから、それじゃ政策をどうするんだ、基本的な立ち位置をどうするんだという

話が、みつともない話だけれども、離党した後でそういう議論になったわけです。

西岡武夫さんだけは、離党する前からそういう問題があるから簡単に離党はできないと、離党に一番慎重だったんですが、僕はそれを押し切って今は離党することが大事だということで離党した。彼は、新しい党を作った以上は基本理念とか主張は絶対大事だと言いつづけていたので、彼が幹事長兼政調会長をやって基本理念の作成や政策を全部やったんです。当時は、西岡幹事長兼政調会長、山口国対委員長という布陣でした。

それで、すぐに予算審議になるんだけど、さあ、その予算にどう対応するか。最初にぶつかったのは、私は最初から政府予算には反対と言う。ところが西岡さんは、良いものは良い、悪いものは悪いと言わなきゃだめだと言うし、山口さんは、国会対策上自民党と付き合ってみたり、いろいろなところと調整をやっていた。僕は、基本的には与党に対して反対するのが野党だから、どんな場合でも反対というのが原則だ。一方、西岡さんは、いや、そうじゃなくて対案を持って臨んで、これが良いと言わなきゃならぬという主張。

そこで党内で大論争をやったわけです。僕は、そんなこと言ったら、何兆円という国家予算を、議員は十八人いるけど、政策スタツフは全然いなくて二、三人の事務担当しかいない。そのスタツフをもって大蔵省が作った予算案に対抗できる対案ができるはずがないじゃないか、だから対案を云々するよりは、とにかく反対だ。

僕は、野党というものは、とにかく政権に反対をして、それを潰すことが野党の最大の仕事で、潰して潰して潰して自分の順番が来るまで潰し続ける。割り切ってそう臨まなくてはだめだ。是々非々というか、反対も賛成もあっていいけれど、予算は対案といっても無理だから反対と言ったけど、それは結局党内の少数意見でした。

次に出てきた問題は減税要求です。野党一致の減税案というのが

毎年出て、それに乗るか乗らないかというところで論争になる。ところが、その野党の減税案には乗れる部分もあるけど絶対に乗れない部分もあって、西岡さんたちは、これには絶対乗れないと言っています。政府案に対案もできない、野党の減税要求にも乗れないとなると、どうするんだという話になって、今言うように、予算委員会は与野党が拮抗しているから、新自由クラブの賛否しだいで否決する可能性もあるから、逆にこっちが追い込まれるわけです。

最後は、野党の修正要求に乗るか、そうでないなら賛成するかの二者択一という話になって、初年度は、もう賛成しかないということになったんです。ですから、結果は賛成だったけれども、そこまでするプロセスでは大論争があったんです。

○紅谷 当時の経緯は、野党から一兆円減税の統一要求が出され、内閣は三千億の減税に応じたので、新自由クラブは賛成したようです。ここで非常に大きかったのは、内閣は予算の内閣修正をして三千億の減税を認めたわけで、今まで内閣修正には内閣の面子から応じて来なかったもので、そういう意味で、新自由クラブの影響は大きかったのだと思います。

ただ、世論はどうだったのか、他の野党はどう見たのか。予算は一年間の国全体の政策の方針なわけで、それに賛成するというのは野党として如何なのかという批判があったと思います。

○河野 極端に言うと、予算に賛成したらもう野党とは言えないよね。

私は、野党は本来反対すべきだと党内では言ったけど、河野さんは余り論理的じゃないというんです。論理的かどうかは別として、今も言ったように、大蔵省が各省を集めて作った予算案よりいい案なんというものは我々のスタッフで本当にできるかと、何回も議論したんです。

しかも、そういう議論をしながら、一方では次の参議院選挙の準備のために候補者探しで全国を回るわけです。国会対策をしている人は、国会対策でぎりぎりして嫌な思いをし、僕らは全国を回って歩いていろんなことを言うけれども、次の日の新聞を見ると、何だ賛成するんじゃないか、おまえのところはどうなっているんだとか言われ、本当につらい年度末だったんです。国会対策はやはり難しいものだなと思いついていましたね。

○紅谷 翌年が参議院選挙でしたが、予算に賛成したことで影響があったのでしょうか。

○河野 参議院選挙は本当に戦いにくくなるんです。そこへもってきて、次の参議院選挙をどうするかということになって、その当時はまだ全国区がありましたから、全国区はどうにも手に負えないわけです。だって、北海道に行け、沖縄に行けといつたってどこに行つていいかわからないんだから。

だけれども、とにかく戦う以上は準備を少しづつしていたら、本部の選対関係者から、参議院は新自由クラブから出すのはやめようと言いつつ出さずすよ。僕らも、参議院は緑風会的なものが理想だから政党がかかわるべきではない、政党が参議院の公認候補を出して戦うというのは本来おかしいんだという理屈でした。

それじゃ参議院はやらないのかというと、十八人はみんな、これだけ頑張ったんだから参議院選挙をやらない手はないだろうと言う。一方で候補者を探しているのに、本部へ帰ると公認候補を出さなさいかという議論になるものだから、準備がなかなか進まなかったんです。

最後は、公認候補を出すには出したけれども、変な理屈をつけて、当選したら党議拘束を止めようとか言つて、そうすると選挙運動に行つても、通つてもどうなるのみたいなことを言われると、選挙にならないわけです。だから、まず参議院はそこで準備がとて遅れるわけです。

さらに、西岡さんと僕との路線論争みたいなものも始まるから、党は推進力がほとんどなくなつて、浮いていただけで精いっぱいみたいな、外には言わないけど、内情は相当深刻だったんです。

○紅谷 前年十二月に総選挙があつて、常会を挟んで七月には参議院選挙ですから、全く間がありませんでした。

先ほど話しましたように、予算は、昭和五十二年度は賛成された。それから、今はありませんけれども、いわゆる値上げ三法、公共料金については全て国会の議決でしたので、国鉄、郵便、健保に対する賛否は、ほとんどは賛成されている。唯一反対されたのが、昭和五十四、五年のちよつど路線対立があつた後の予算かと思われまふ。

○河野 路線論争をやつて、西岡さんと僕の違ひは、西岡さんは自民党基盤政論、日本の政治をやつていくのは自民党しかないんだと。その自民党がだらしなから我々はショックを与えようと思つて離党したんじゃないか。

それに対して僕は、いや、そうじゃないだろう。やはり国民に、有権者に選択肢を与えることが我々の仕事なので、これから先も保守は二つあるべきで、常に有権者の選択肢として存在しなきゃだめだという保守二党論だったけれども、西岡さんは、河野さんの主張はわかるけど、そんなことは無理だ、それよりは、やはり自民党をきちつと立て直して自民党で政治をやつていくのが現実的で、それしかないんだと言い、毎晩、深夜まで論争していた。しかし、全然妥協点がなく、他の人達は、二人で何をやつているんだとあきれ返つて、しかも、それが党首と幹事長だから、みんな困つちゃうわけです。

○紅谷 党内の路線対立はありましたが、国会の中で新自由クラブらしい存在感を見せたのは国会改革案で、今までにない主張を幾つかされたと思います。

○河野 新自由クラブは、代表が本会議の代表質問、幹事長が予算

委員会という運用をしていたんです。西岡幹事長が予算委員会の質疑問頭で、大臣が全員座っている必要はないから退席していいという提案をして、それは西岡さんに言わせると、自民党の国対にいた頃、何とか大臣が並んでいなくていいようにしようと言つたことを言ったのに、自民党は他の野党との関係があるから乗つてこないんです。大臣方お帰りくださいと言つても誰も帰らない。それどころか、他の野党から、理事会の話と違ふから待てと言われて、予算委員会が止められて西岡さんは質疑できないんです。自民党は、野党でちゃんと意見をまとめてこいとか言い、一野党対政府というんじゃない話ではないということになつて、提案はしたけれども実現しなかつたんです。

○紅谷 西岡幹事長は提案されていますが、予算の理事会で、当時は総括質疑と呼び五日から一週間ぐらいありましたけれど、その間ずっと全大臣出席と決めていたので、その決定を変えることができないという結論でした。

○河野 そうでしたね。そういう理由があることは間違いないんだけれども、国会運営上言つてはみたものの、なかなか実現はできないということになつた。

ただ議員が十八人いたので、ほとんどの委員会に委員がいて、僕は懲罰委員だったから国会活動はほとんどやつていなくて外回りばかりだったけど、各委員会でもわづかながら質疑はできて、十八人では議員立法の提案ができない。三人足りないからできないんですよ。さつきから言うように国民の支持率が高いけれども、国会において一番最小政党だから何もできないという実態があつて、その世論との乖離というのか、ギャップに随分悩まされたんです。

あんなにみんな応援したのに、国会へ行ったら何にもしないじゃないかと言われる。だから、あと三人通つていけば、議員立法ができたもつといういろいろなことができたんだけど、それが支持

者にわかってもらえなくて、すごく辛い思いをしたんですよ。

○紅谷 予算委員会では全大臣が出席する必要はないとか、赤字だった国鉄の無料バスは返上するというのが、国民的にはアピールにはなったと思います。

○河野 国鉄バスの返上は、できることだけでもやろうという話で、他にもいろいろ言ってみただけ、なかなか実現できない。国会の場はやはりどうしても数が決定的な力を持つから、少数ではできないということだったんです。

○紅谷 先ほどの予算に戻りますけれども、新自由クラブが賛成したので、与党としては委員会の否決は何としても避けたい事態でしたから、本当に安堵したと思われまます。

○河野 そのとき、予算委員会には田川さんと大原一三さんの二人の委員がいて、田川さんは私と割と近くて断固反対だったけど、大原さんは大蔵省出身の人だから、野党の修正なんか見ても、やはり政府の言っている方が本当だよなんて言っちゃうんだ。

○紅谷 このときは賛成だからよかったです、昭和五十四年度予算は反対だったので、大原さんは本会議を欠席されました。

○河野 五十四年のときには、予算委員会で委員長が賛成の諸君は起立願いますと言うけれども、新自由クラブが立たないものだから、みんなでおおつと言って、とうとう否決になるんです。

だから、さつきも言うように、外づらは一生懸命繕ったけれども、党内の賛否の葛藤は相当あったんです。やはり委員会活動をやっていると、しがらみができるし相手の理屈もわかってくるからね。僕は、その時外回りをやっていたから、とにかく絶対反対と言っていましたね。

そして、西岡さんとの論争が続いているんです。西岡さんという人は本当に真面目で、正当な主張を絶対曲げない人、妥協性のない人だったから、こっちも妥協性がなかったせいもあるけど、二人で

にっちもさっちもいなくなつて、それで西岡さんは突然離党するんです。

○紅谷 新自由クラブは、十八名という少数ながら、予算委員会ではキャスティングボートを握っている存在でした。

また、支持率の話が出ましたけれども、単に与党からの票だけではなく、今まで選挙に行かなかった人たちの票が新自由クラブに行つたのではないでしょうか。

○河野 それはあつたと思うんです。だから、あときは投票率がグンと上がったんです。投票を締め切つて投票率が出たときに、自民党は、これはやられたと思つたらしいからね。

《最初の試練―参議院選挙》

○紅谷 昭和五十一年十二月の衆議院選挙は大躍進でしたが、翌年夏の参議院選挙では三人という結果でした。

○河野 正直、参議院は、支持率からいくと七、八人は当選するんじゃないかと思つていた。思つていたというよりマスコミがそう言つていたんです。それが三人だったものだからマスコミは大惨敗と書くけど、考えてみると生まれたばかりの小政党が三人通れば大惨敗というほどではないのかもしれない。当時の世論調査では一三%の支持率で、自社に次いで高い支持率だったから、候補者を探すのも、あなたが立候補してくださいれば当選は全然心配ありませんよと言つて口説いて歩いたんです。

大平側近で、高名なエコノミストだった大来佐武郎さんを口説き落とし、タレント弁護士だった円山雅也さん、青年会議所の前の会頭だった佐藤敬夫さん。それからもう一人は、中央公論の編集長だった笹原金次郎さん、彼はメディアの中では一番信頼の高い立派な人だったんです。

四人通ればいいと言っていたら、当選は円山さんだけでした。佐藤敬夫さんは五十一番の次点。全国区で五十一番になれば大体は六年の間には繰り上がるんだけど、このときだけは誰も辞めないし亡くなる人もいなかった。とうとう六年間次点のままだった。

大来佐武郎さんは、僕は大来さんが当選してくれば政策委員長が代表をやってもらってもいい。そうすれば新自由クラブの政策が安定して、経済界なども安心して支持してくれるだろうから切り札だったんですよ。年齢的にも代表をやってもらってもいいと言ってお説いた。大来さんも、さんざん考えた末やってみましょうと言って立候補されたけど、選挙の途中でどうも拍子が悪いというんです。それは、大来佐武郎という名前が読めないからで、平仮名にしてくれと地方から言ってきたんです。ビラを張って頼みに行っても、名前を正確に読める人が少ないというんだ。それで大来さんに平仮名にしましょうと言ったら、いや私はこの名前で社会的評価を受けているので、名前を平仮名にする気はありません、読めない人の支持はなくてもいいですみたいな話になった。

これはいかんなと思っていたら、選挙戦の途中で選対委員長の山口君から、このままいくと四人とも落ちるから、誰か一人切らなきゃだめだと言われたんです。誰か一人というと、笹原金次郎さんしかいないわけですね。切れといたって選挙は半分過ぎていて、笹原さんの票は独特の票だと思っただから、降ろしてその票が他の三人にまわるとも思えなかった。笹原さんという人はとても立派な人だから、もしあなたが降りてくれれば他の三人が水面上に浮かび上がることが出来るから降りてくれと言えれば、彼は降りてくれたかもしれないけど、そんなことをいう気はなかったですね。それに、笹原さんの後援会長と名乗って旗を振ったのは有吉佐和子さんなんです。ああいう人がやり出すと怖いもの知らずにやるから、笹原さんに降りてくれとは言えないと言ったら、山口君は、そんなに甘いことを

言っていたらみんな落ちちゃう、それでいいならやったらいいよと言われて、そのときにはもう本当に進退きわまって、すぐきつかったですね。

結果は、円山さんの他はみな落ちて大失敗でした。

地方区には九人立てたのかな。立てないと全国区が戦えないから、地方区も立てなきゃだめだということで、それは確信が持てたわけじゃないけれど、全国区の応援といっても足がかりが何もない。福島の石原健太郎君は、石原幹市郎さんという自治大臣や福島県知事をやられた人の息子さん。北海道は坂東さんという大学の先生で、北海道放送の朝のキャスターで大人気だという、大阪は中村鋭一さん、鋭ちゃんといえど泣く子も黙るといって、とにかく毎朝、阪神が勝つと「六甲おろし」を歌うというので大人気のパーソナリティーだった。個性的な人を揃えたけれども、そのさなかに、本部では参議院を戦うかどうかなんてやっているわけだから、頑張ったけれども地方区は当選二人、全国区も一人だから、それを考えると大惨敗ですよ。

○紅谷 大惨敗という結果でしたが、原因は何だったのでしょうか。
○河野 それは、明らかに西岡さんと僕の路線論争で推進力を全く失ってしまったのが原因だろうね。実は新自由クラブは路線論争が決着しないものだから、結党大会というか全国大会を開けなかったんですよ。

新自由クラブの立党は昭和五十一年で、全国の代議員大会を開いたのは五十三年二月ですが、とても気まずい全国大会になった。それは、僕が代表挨拶をするという原稿を西岡君が書き直したんですよ。僕の挨拶はその頃から中道に振っていたのを、彼はもう一度本来の保守に戻さなきゃいかんという主張で、とてもちぐはぐになって、その後、地方の大会を徐々にやろうと回っていて、東北大会の日に彼は離党するんです。

○紅谷 新自由クラブは、参議院選挙での惨敗、西岡幹事長の離党という危機に直面している中で、都知事選の候補者問題が出てきました。

○河野 新自由クラブは、東京都知事選挙で牛尾治朗さんを担ごうとした。牛尾さんは僕と良かったのは間違いないけれども、西岡さんとも悪くなかったし、みんな、最初は牛尾でいいんじゃないかというんで走ったんですよ。僕は、そのつもりでいたら、西岡さん達はどこかで降りたらしく、途中からは走っているのは僕一人になったんです。

牛尾さんは、大平さんととても良かったから、牛尾を担げば、大平と新自由クラブでいけると思っていた。そうすれば中道も絶対乗ってくるということでいたのが、牛尾を担いでいるのが新自由クラブだというのが少し早く出たものだから、自民党の都連が引いたんですよ。

それで、奥野誠亮さんが、この人は内務省で、鈴木俊一さんを引っ張り出したんです。それで大平さんはできないということになり、牛尾さんも大平がだめだということで降りてしまった。それも新自由クラブ内部分裂の一つの要因だったんです。

都知事選は、鈴木俊一、太田薫、麻生良方。新自由クラブは自主投票ということになるんですが、最後には責任をとって僕に出るという話になった。牛尾で走って出ないものだから、今さら鈴木に乗りかえるのは後追いまいたいなことで自主性がない。かくなる上は代表が自分で都知事選に出ると言われたんです。

都知事を経験してまた戻ってきたらいいじゃないか、我々はそれを待っているともみんな言ってくれた。だから、全くそういう選択肢がなかったわけじゃないけれど、みんなに離党を誘って新党をつくっておいて、一年か二年で自分は都知事をやるというのは幾ら何でも無責任だと思っただし、自分の目的と違うからできないと断ったん

です。あの頃はとても思い上がっていたから怖いものがなくて、やれば勝つに決まっていると思っただけで、それでもやるべきじゃないと思っただけでしたね。

今だから言えるけれど、鈴木俊一さんは、最後は、深夜に平塚の僕の家まで来て、河野さん、私を担いでくれませんかと言われて、いや、そうはいきませんと言って断ったけれども、大先輩に悪いことをした。そういう紆余曲折がありました。

○紅谷 河野先生の都知事選出馬という話は、党内から出てきた話なのでですか。

○河野 それは、どこまで本心かわからないけど、中道の仲間の佐々木良作さんとか田英夫さんが、彼らは自民党を負かしてやろうと思っているものだから、君が出れば勝てるかもしれないと思って随分しつこかった。それに山口君も西岡さんも、ここは君が責任をとってやった方がいいと。それと、新自由クラブ都議会に若手の主戦論派がいたんですよ。伊藤公介君という人は、やはりここは党としてきちんと河野さんが出た方がいいと。ちょうどその前に都議選をやって、新自由クラブの都会議員が七、八人いて、その中には小杉隆君もいた。一時は都知事選は太田と河野との一騎打ちになるかもしれないと言われていたんです。

神奈川県知事選に長洲一二さんが出るタイミングにも一時担がれたことがありましたね。それは、藤山愛一郎先生から出てくれないかと言われたけれど、そのときは、とにかく国政を目指しているもので、途中で横道にそれる気はないと断ったんです。いろいろなことがありました。

新自由クラブは、その後の衆議院選挙も十八議席から四議席に大惨敗。参議院選挙の三議席は、言われてみれば大惨敗なんだけれども、そんなに大きな直接的なダメージじゃなかったように思うんです。ただ、そのときに刀祢館正也さんが、議員総会で「勝ちに不忠

議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」という言葉があるように、その敗因をきちっと探して繕って戦えば次は勝てるから頑張りましようと言つて、おお、そうだと云つたけれども、惨敗して四人になつちやうんだ。

刀祢館さんはとても立派な人で、ランドセル無用論というのを主張したりした西宮の教育長でした。とてもユニークな文教政策を実践していて、西岡さんの文教政策に傾倒して西岡さんのところへ来ていた人なんだ。選挙も実に新自由クラブらしい、きれいな選挙で勝つたけれども、一期で亡くなってしまつたんです。

○紅谷 参議院選挙では、新自由クラブの得票率自体は非常に高く、衆議院選挙のときよりも高かつたけれども議席は伸びませんでした。

○河野 参議院というのは二人区が多いから、ナンバーツーにならないと当選しないんですよ。衆議院は三人区とか四人区があるから新自由クラブは三番目か四番目にひっかかるけど、参議院の二人区では自民党と社会党がとちやうんですよね。

だから、全国区で議席を取りたかつたけれども、まさか一人とは思わなかつた。しかも、落ちた人はみんな、それぞれ意味のある人だつたから、とても残念でした。

《基盤政党論と保守二党論の対立》

○紅谷 新自由クラブが選挙で負けた一つの大きな要因であつたという、党内の路線対立についてお聞きしたいと思います。

昭和五十四年の衆議院選挙の前に、路線の対立から西岡幹事長が離党されましたが、その要因だつた基盤政党論と保守二党論についての対立はいつからだつたのでしょうか。

○河野 ほぼ最初からあつたんです。本当に路線論争だつたけれども、正直言うと、その裏には資金問題もあつたんです。党の財政に

ついては企業献金で賄うべきでないという主張だつたけど、いざ新党を作ってみると、企業以外で金を出してくれるところはやはりないんですよ。

僕らは、個人献金に頼つて戦うんだと言つていたんです。最初の選挙では集まつたけれど、個人の献金は続けて何年もとはなかなかならなくて、だんだん先細りになつていった。そうになると、やはり企業の献金をもらわなきゃだめだということで、有田さんが財政委員長をやつておられて金集めをしてくれたけど、党内では、あまり企業からもらうのはいかぬものかみたいな話もあり、有田さんは、それじゃやりやうがないみたいになつた。

最初は、企業献金はできるだけもらわないようにしようとか、企業献金は一部だけ認めようとか言つていたのが、それじゃとても賄いきれないから、企業献金は半数を超えてはいけなかつたとか、党財政の半分を超えてはいけなかつたとか、いろいろな説明をつけていたけれども、立候補者は増えていくのに財政力は少しも増えないという状態でした。

しかも、毎年、衆議院をやり参議院をやり、統一地方選挙をやりと選挙が続きました。とにかく新自由クラブ十年のうち九回も国政選挙をやり、資金はすつからかんになつて、財政的には本当にうちもさつちもいかなない状況でした。そういう問題を抱えながら路線論争をやっているから、周りでは何をやってるんだと思つていたでしょうね。

西岡さんは、自民党を離党する前から、数億円の離党資金は準備していなきやおかしい、それもなく離党しようというのは無責任だと言つていた。それを突つ切つて離党したから、だんだん西岡さんの正論が効いてくるんですよ。

そうしているうちに、西岡さんは自分が幾ら正論を吐いても河野はわかつてくれないとか、党がそのままじゃだめになるとかという

ことを相当深刻に考えられたと思うんです。僕は今でも西岡さんという人は尊敬しているし立派な人だと思えますが、とにかく妥協をするとか、この場面では何とかしようという気持ちには全然ない人だった。だから、基盤政党論でぶつかると、他はもうどうにもならなかったんですよ。僕の方も譲らなかったんだけどね。

それで、最後は代表と幹事長の対立だから、代表の人事権で幹事長を更迭したらどうだみたいなことを周りが言い出したものだから、西岡さんは、俺がいて邪魔なら党を出ると言って飛び出してしまった。

やはりそれは大きなダメージになったし、しかもそれを新聞に連日書かれてイメージが悪くなりましたね。

○紅谷 山口さんも、考え方は西岡さんに近かったのではないですか。

○河野 そうです、近かったです。

それは、西岡さん、山口さんほともと三木派で一緒だから、ずっと二人は話合いをしていたんです。結成時の六人は、西岡さん、山口さんが慎重な考え、僕と田川誠一さんが急進的な考え方で、小林正巳さんと有田一寿さんというのが真ん中でした。

○紅谷 路線の対立が結党のときから底流としてくすぶっていたので、党大会をなかなか開けませんでした。参議院選挙後の昭和五十三年二月に初めて党大会は開かれたものの、活動方針案の文言に基盤政党という文言があったので、おかしいというような話になったわけですか。

○河野 そうです。基盤政党論という文言もおかしかったんですけども、一方で、そのころから私は中道四党首会談を始めただけです。公明党の竹入義勝、民社党の佐々木良作、社民連の田英夫と僕の会談は密かにやるけれども、これがどういうわけか翌日の朝には全部漏れちゃうんですよ。

竹入、佐々木というのは、とてもぴたりいつていたけれど、二党だけじゃインパクトが足りないもので、少しでも数を増やしたいと思ったのか、私を誘い、田君を誘って中道四党。

そうすると、西岡さんたちは、河野さんは竹入とかに誘われてひよるひよる出ていくものだから、結果、向こうはプラスになるけれども、こっちはマイナスになると。つまり一種の純血主義で、保守たるものが、わけのわからぬ中道と仲よくなかちやいかぬという。だけれども、僕はうちだけでは数が足りなくて国会対策で苦労しているから、少し間口を広げたらいいじゃないかと言うけど、そこはなかなか理解されない。

僕は、全国を歩いてみると、やはり選挙区によっては公明党の支持を得た方が当選の可能性があったり、民社党と組んだ方がいいところもあるの、竹入さんや佐々木さんと仲よくしていくことは絶対マイナスじゃないと思っていた。特に僕は、これは余り言っちゃいけないことかもしれないけれども、竹入さんを信頼していたんです。竹入さんは僕には、河野さん、これは気をつけた方がいいとか、これはやらない方がいいとか、いろいろなことを言ってくれた人でした。

○紅谷 そういう中道政党との連携からなのか、新自由クラブは、昭和五十四年度予算に初めて反対されました。五十四年度予算というのは、早期警戒機のE2C予算の執行について、激しく与野党が対立した予算委員会でした。

○河野 そうでした。予算委員会は、自民党が委員長を出しているから野党の方が一人多くて、予算委員会では予算案を否決するんです。しかし、本会議では可決した。

西岡さんや大成さんが離党するのはその四カ月後だから、それが最終的に引き金になったという感じだね。

○紅谷 予算審議後の昭和五十四年六月に新自由クラブの両院議員

総会で、河野代表が西岡幹事長に辞任要求を突きつける場面があり、それで一応おさまったと思われましたが、直後に西岡さんが離党されたようですが、河野先生が辞任要求を突きつけたというのは、想像できない光景ですが。

○河野 それは、そのときに小林正巳君という、おとなしい人だったけれども、河野さん、西岡さんを切る以外にはもう我々が生き残る道はない、代表として最後の責任を果たすべきだと言ってこられ、やむにやまれぬ状況だったんです。

その後、街頭演説に行くと、西岡さんはそこで、明日からは河野を支えて、全力でやりますと街頭では演説するけれども、一カ月後の東北ブロック会議の日に離党しちゃうんです。さらに、その二日後に、菊池福治郎さん、大原一三さん、大成正雄さんの三人が離党するんです。

それで、党は小さくなってしまいうけれど、路線論争は終わって決着はつくんです。

《続く選挙―二回目の衆議院選挙》

○紅谷 昭和五十二年の参議院選挙は惨敗という結果に終わり、その後、党内の路線対立から西岡先生その他三人の衆議院議員が離党し、結党三年での痛恨事でした。しかも、その直後の昭和五十四年十月に新自由クラブとしては二回目の衆議院選挙を迎え、非常に厳しい状況で選挙戦に入っていくことになりました。

○河野 二回目の選挙なので、一回目に比べれば事務的な準備はできるけれども、やはり何といっても幹事長の離党ですね。それと同時に、今言うように、四人離党したということで、大変厳しい選挙になった。それでも一定の支持率はあったので、そんなに負けないんじゃないかという思いがある一方で、これは本当にひどい状況だ

と、非常に不安な気持ちで選挙に入ったんです。

選挙を戦ってみると、一回目とは違って有権者の期待感みたいなものがまるで無くて、そうなると思いがけないものだから、非常にふわふわした選挙をやってしまった。厳しいなと思いつながら戦ったけれども、十八人いたのが四人になるとは予想外の敗北でした。私と田川さん、山口さん、新しく田島衛さんの四人でした。スターティングメンバーだった小林さんが落ちたのは辛かったです。

参議院選挙で大来さん、佐藤さん、笹原さんの三人を全国区で落としたことで、いろいろなところに影響がでた。特に大来さんには西岡さんの後の政策面の柱になってもらおうと思っていたのを落としたということで、政策的にも不十分だったのが原因だったと思います。

結果、主要な委員会には入れないし控室も狭くなるし、財政がさらに厳しくなりました。今は政党交付金があるけど、当時はそんなものはないから党職員を賄うこともできない。しかし、党職員を減らすわけにもいかなかったから、無理して抱えられるだけ抱えていましたが、一時は本当にしよぼくれていたんです。その直後に、自民党が党内分裂をして、選挙直後から大平、福田の対立が始まって首班指名もできないという騒ぎになりましたから、こっちがしよぼかれていられないような状況になりました。

○紅谷 当時の新聞報道では、新自由クラブは非常に苦戦するのではないかと、ただし減るは減るだろうけれども十議席ぐらいは獲るだろうという予測でしたが、結果は四議席という惨敗でした。

それはやはり西岡さんの離党で、新自由クラブのイメージが傷ついた面はあると思いますが、前回の選挙と比べて、選挙民の期待感が随分違ったという印象だったのでしょうか。

○河野 それはそのとおりですね。それと、前にも言いましたけれども、前回は、共産党と入れかわ

って当選したんですね。だから、新自由クラブが増えた分だけ自民党が減ったわけじゃなくて、共産党が減ったんです。だから、共産党が次は新自由クラブを狙って猛烈にやっていたので、今回は我々が減った分は共産党が復活したんですね。

前回、こっちは上位当選していたから、共産党が次点だったというのに余り気がつかなかったんです。それが四人になった最大の原因でしょうね。加えて、投票日は台風で大雨だったから、組織戦がやはり強かったんですね。

○紅谷 共産党は、前回のロッキード後の選挙は、三十九議席からほぼ半減したのが、今回の選挙は今までの最高で、十九人から一挙に四十一人になり、次点の共産党が新自由クラブと入れ替わったという感じでした。

○河野 完全に入れ替わった。四人になったけど、次点が十人くらいいたから、得票数と議席との関係からいうと、新自由クラブは、何百万か獲って四人というすごく勿体ない票になったんです。

だから、物すごく割の悪い選挙をやったんですね。最後の決め手は浮動票だったんですが、共産党と新自由クラブが浮動票を取り合った結果、共産党に取り返されて、共産党躍進、新自由クラブ惨敗ということになったんです。

○紅谷 自民党も敗北で、保守系無所属を取り込んで過半数を維持しましたが、選挙前に財界が新自由クラブを非常に警戒して、自由社会研究会という集まりを作ったというのですが、それはどういう団体だったのですか。

○河野 自由社研は、発起人というか中心だったのはソニーの盛田さんと、もう一人いました。それが、日本の民主主義というか自由主義が危ないと言って、僕らは、自由主義、民主主義を守るために共産党に票が流れちゃいかぬと思ってやっているんだと幾ら説明しても納得しない。中には新自由クラブは自由主義を食い散らす害虫

みたいなことを誰かが言い出して、若手財界人と若手自民党が集まったんです。結構一生懸命で、毎週金曜日だけに集まって、朝飯を食べて、頑張り頑張りみたいな話をやっていましたよ。

皮肉な話で、この後の四十日抗争で、当時、安倍晋太郎さんが福田さんを応援してくれと言ってきて、君が福田を応援してくれば自由社研に推薦してやると言ってきた。しかし、自由社研というのは新自由クラブを潰そうと思っただけじゃなく、冗談じゃない。そんなものに推薦されてもうれしくもないから、だめだと断ったこともありましたね。

○紅谷 新自由クラブは、選挙が終わった後の十一月に、代表が河野先生から田川先生に交替されました。

○河野 それは大平支持の後の全国代表者会議で僕は辞めるんです。辞めると言ったら、みんなから、ここで辞めると、大平支持で責任を取ったと言われると悔しいじゃないかと言うから、あれは間違っていたなかつたんだ。これは選挙の敗北の責任だと一生懸命言い、幾ら記者会見で説明しても翌日の新聞記事は大平支持の責任と書かれて、随分悔しい思いをしました。

○紅谷 田川代表、山口幹事長という体制になりましたが、河野先生は役職に就かれていたのですか。

○河野 無役でした。無役だったけれども、地方遊説だけはずっと続けていましたね。

○紅谷 その頃は、もう地方組織とか選挙体制は整っていたのですか。

○河野 何もないんです。選挙が終わったばかりで、半年で選挙があると思っていないから、落選した連中は金もないし、選挙体制をそのまま続けるということとはとてもできないから、選挙事務所も閉めて、もうだめだと言っていたんです。

それを田川さんが代表になって、あの人はこつこつ歩く人だから、

そんなことを言わないで頑張れと言って、尻をたたいて頑張らせているうちに選挙になったんです。それが格好の選挙運動になったわけです。

田川代表はともしつかりやって、もうだめだと言っていた連中を一人ずつ呼んだり、あるいは自分が出て行ったりして抱き起こして頑張れと言って歩いた。ただ、頑張れと言うけれども、本当は気つけ薬を持っていかなきゃだめなのに、その気つけ薬がないんだ。それでも田川さんは相当活を入れて回ったんです。

○築山〔衆議院事務局〕 代表を辞めることについては、選挙直後には田川さんと相談されていたんですか。

○河野 そうです。そのときには、辞めるなど田川さんには止められていたんです。止められていたけれども、これだけ壊滅的に負けて誰も責任を取らないわけにはいかないじゃないかと。しかも西岡離党の原因をつくって、敗北の原因は僕だということは非常にはつきりしていましたから、田川さんには辞めますと言っていたんです。

《大平・福田四十日抗争の影響》

○紅谷 総選挙で惨敗して議員が四人になり、これからの国会にどう臨んでいくのかという中、自民党内の分裂で大平・福田四十日抗争が起こり、新自由クラブは巻き込まれていくことになりました。

○河野 選挙で四人になって、これからどうするかと言っていたら、首班指名にどう臨むかという話になったんです。どう臨むかといったって、普通はそれぞれの党首に投票する。ただ、このままいけば自民党が二つに分かれて自民党同士が一位、二位の決選投票になるから、社会党は全部棄権だと言っていた。

それで、我々も最初は棄権かと言っていたけれども、そこで田川さんの提案だったか、それは自民党からも冗談半分で、決選投票に

なったら頼むよな程度の話で、こつちも冗談半分に、そのときはそのときでと言っていると、自民党内の対立がすごく過激になった。

大平さんの方は自民党の総裁ですから、自民党として正式に新自由クラブという政党に大平を支持してくれと言ってくるんです。だから、考えましようという返事をした。

福田さんの方は、福田に入れてくれと言ってきたても、全く非公式なわけです。村田敬次郎さんが僕と割と親しかったものだから、福田さんを応援してくれないかと最初に言ってきた、最後の方は安倍晋太郎さんが出てきたのかな。

僕は、自民党を離党して新しい政党を作って一緒にやっていきたいから、福田を応援してくれと言うなら真面目に考えるけど、党内の反主流派だということで応援しろと言われても、それはできないとお断りしました。

最初は、大平に入れてくれれば連立しようという話は全然なかったんです。むしろこつちが勝手に、少しでもましな方を選ぼうよと、よりまし政権という言葉を使っていたんです。

○紅谷 大平さんと福田さんの争いというのは、三木総理の後継は福田総理でしたが、その後福田さんと大平さんが争って、田中派が支援した大平さんが勝ったものですから、その対立がずっと続いていたのでしょうか。

○河野 そうでした。だから、大平か福田かというのを真面目に考えれば考えるほど、例えば、田中に支持されている大平を新自由クラブが担ぐのかという意見もあったんです。田中政治を徹底的にだめと言ってきたんだから、その田中に支持されている大平はまずいんじゃないかと。田中を批判してきた福田の方が、そういう点から見ると筋じやないかという主張もあって、そんなことを福田派はしきりに言ってきましたから、そこはちよつと悩むところだったんです。

四十日も抗争をやられると、いろいろなうわさがあった、毎日毎日違うことを言ってくるんだ。それで、意を決して大平で行くぞと言うと、いや大平と福田はもう仲直りして大平一本になったから、そんな四票ぐらいどっちに行つたつてどうつてことないから止めた方がいいと言われたりして、とても迷つたんです。

○紅谷 自民党の中が完全に二分された状況でしたけれども、これほど自民党の中が対立したことは今までにあつたのでしょうか。

○河野 今までにないでしょうね。だから、我々はこのチャンスしかない。僕らはその頃から自民党一党支配の政治を変えるには、自民党を減らす方がいいんだけど、なかなか減らないなら割る以外にない。大平、福田の対立に割り込んでくさびを打つことが必要だというのを、田川さんがイニシアチブを取っていて、僕もそれに全く賛成だったんです。

その時に気が楽だったのは、二回目の決選投票で自民党のどっちかを選べばいいということだからだったけれど、そうしたら大平さんから、一回目から入れてくれと言われて、これはちよつと困つたんですよ。

政党として一回目はやはり自分のところの代表に入れ、二回目に被選挙権がなくなれば、それはどっちかを選ぶか棄権とかとなるけれども、大平さんは、一回目を勝つたら地すべりの票は来るけれど、負けたら逆に四票や五票積み上げても間に合わないぐらい負けるから、河野さん、この勝負は一回目が勝負の分かれ目だから一回目から頼むと言うんです。その気持ちはわかるけど、僕の方だつて自分の党の代表に入れなかつたら何のための選挙だったのか、政党なのかわからないからと言つて、それはわかるけれども、君のところの問題よりもお国の問題の方が大きくて大事じゃないかと、そういうやりとりをしましたね。

その中で、考え方は一緒なんだからと連立の話が出てきたんです。

そのころ、大平さんはしきりに、こんな遅れた政局をつくつていのは国政だけで、地方政治はみんな連合政治になっていいるじゃないか、もう政党ではなく、いい方に付くということではないんじゃないかと言う。僕らも考え方はそう思つていいるという話ですよ。

○紅谷 最終的には大平総理から連立政権の呼びかけがあつたようですが、総理指名選挙までの間には、大平派、福田派からの話だけでなく、中道として方向性を出そうという話はなかつたのですか。

○河野 中道は自分たちの主張にとてもこだわつて、一回目は竹入、佐々木に入れ、二回目は棄権するから、どうぞ勝手にやつてくれみたいな話だったんです。

僕らも、ぎりぎりのところでは中道と一緒にやる方がリスクは少ないというので、我々は大平に入れるつもりだと言つて声をかけてみたけれども、自民党を支持するわけにはいかないと、最後まで全然乗つてこなかつた。

あのころの公明党と民社党は、福田と大平のどつちかわからなかつたんですよ。公明党は恐らく田中との関係から大平だつたと思うけれども、民社党は田中批判をやつていましたし、あの頃の民社党は相当右ですから、やはり福田の方が良かったのかもしれない。

○築山〔衆議院事務局〕 大平総理からは、連立という話以外に大臣の話とか何か約束みたいなものはあつたのですか。

○河野 ポストの話はなくて、一緒にやつてくさいという話だったんですね。

最後に国会周辺でいろいろな話を聞いたら、どうも今夜、大平と福田は手打ちをして一本になるとい話があり、それなら付き合つていいることはないと言つて家に帰つたんですよ。当時は平塚に住んでいて、十二時過ぎでしたか家に着いたと同時に、大平さんから電話だといから何事かと思つた。

そうしたら、河野さん、ぜひ力を貸してほしいと言つてから、私は

大平さんを支持するつもりでいますよと言ったら、それはありがたいと。

そこで一回目からお願いたしたいと言うから、それは幾ら何でも全員の党員への裏切り行為になるから無理で、一回目は私に入れて、決選投票になって大平ということに決めていますと言ったら、いや、それではだめなんで、一回目から応援していただかないと勝てませんと。勝てませんといったって、そう簡単に結構ですとは言えない、明日の朝みんなで大平さんの申出を話しますからと言って電話を切ったんです。

それで、翌朝、本会議を開く日の朝ですが、たった四人だけけれども議員総会をやって、田川さんは、とにかく福田を阻止しなきゃいけないんだから、一回目からやったらいいじゃないかと言って、山口君もそうだなと言い、一期生だった田島さんは発言せず従うというので、一回目から大平で行くことになった。

党の筋としては、直前の総選挙で新自由クラブに投票した人ほどうなるんだと、比例代表でも入れているわけだからね。首班指名のときは党はないのかということになるから、そこは相当深刻に悩んだのは事実なんだけれど、あと数時間で首班指名選挙で、もうしようがないということになった。

それで、大平に一回目から行くことについて、最後のところの決心をし結論を出した。大平は連立、連合の時代に対応した多様性を重んじた政治をやるという考えを支持しよう。何も担保はないけど大平の言葉を信用しようというので、賭けたんだ。

とにかく大平さんを一回目から勝たせなきゃしようがないからと決心して、結局それで勝ったようなものですよ。四票差じゃなく十票差でしたけれどもね。

ところが終わってみて大失敗だったのは、そうやって深刻に悩んだ結果なのに、参議院を忘れていたんだ。参議院議員が五人いたの

に相談するのを全く忘れていて、終わってから参議院の仲間が怒鳴り込んできた。参議院の人達は、俺らは大平と言われていないから河野と書くと言うんだ。事前に何の相談もなく何だと言って怒られてね、それが理由で円山さんが離党するとか、その後は参議院はごたついた。大平を支持したばかりに、こっちが党内不和というか、党内の問題を引き起こしてしまつて大失敗だった。

○紅谷 自民党の主流派は大平さんを支持する大平派と田中派で、反主流派は福田派、中曽根派に加えて、三木派も入っていたのは田中さんとの関係だったわけですか。

○河野 三木派は、反田中で固まっていたから、福田さんに行っただけですね。

○紅谷 これだけ大きな亀裂が入ると、自民党分裂という話はなかったのですか。

○河野 一時はあつたんですよ。大平、田中の方は自分たちが自民党だと当たり前を考えていたけど、福田の方は違った。ただ、福田は、常に我が輩は保守本流だとか言っているから、動くつもりは全然なかったけれど、三木派とかは、本会議場で対立するなら分裂して対立しないと政党政治としておかしいという話があつたんですよ。それは実際はできない事ですが、その頃はかつかしていたからね。

しかし、自民党の中にこんなに大きな対立ができたのは、やはり大平と福田という人材があつたからです。ただ、本会議場までそのまま持ち込むというのは、ちよつとあり得ないことだけれどもね。この時は、議運はどうしたんだつたかな。

○紅谷 召集日に議長と副議長、議運委員長を決めて、本会議はその後一週間ぐらいはセットだけしてずっと流会で、自民党待ちでした。もうこれ以上待てないということで、総理指名に入りました。

自民党では、この事態の打開策として、総総分離案という話も出ていたと記憶しています。

○河野 福田さんは総総分離論だったんですよ。総理と総裁を分けてやるんだと福田さんが言い出したけれども、大平さんは蹴ったんですね。

○紅谷 主流派、反主流派が拮抗して、主流派の本拠地は党本部、反主流派は院内でした。

衆議院の方は反主流派が多かったので、後継は代議士会で決めるべき、主流派は、参議院が多かったので両院議員総会を開くべきだと主張し、党本部と院内に分かれて激しい対立でした。

○河野 激しかったね、あの本会議場なんかどきどきしたね。

当日には、新自由クラブはどうも一回目から大平に入れるらしいとささやかれていたんです。それは大平の方がしゃべった。

○紅谷 衆議院では決選投票で大平さんが指名されますが、参議院は、反主流派が少なかったものですから、大平さんと社会党の飛鳥田さんの決選投票になりました。

結局、大平総理ということで首班指名が終わり、組閣に入ります。○河野 組閣も、最初から連立でポストという話ではなかったんですよ。

初めは、田中六助さんが、新自由クラブは院内会派という話を持ってきたので蹴ったんです。そうしたら、もう少し突っ込んだ話をしようと言ってきたので、田川さんは、田中、山口ルートは危ないから、少なくとも鈴木善幸さんが言ってくれば正式ということでもこっちも受けとめると押し返した。

それは田中六助さんにしてみればメンツはないのだけれども、それでも大平を支持してもらいたいからと善幸さんが出てきた。それで、これまでの話はスタンドプレーや個人プレーじゃなくて大平の本心だということが確かめられたから、あとの細かいことは佐々木義武さんにやらせるということになったんです。

田川、佐々木というのは科学技術特別委員会と一緒にあったから良

かったんです。それからはずっと佐々木さんが使いに来て、最後に大平の方からということ、誓約書みたいなものを持って来て政策を幾つか書いて、これで一緒にやろうと言ってきた。

○紅谷 それで、連立ということになって、法務大臣なのか文部大臣なのかという話が出てきたわけですか。

○河野 途中で古井喜実さんが、文部大臣でどうかと言ってきたので、みんなに言ったたら、文部大臣なんてだめだ、新自由クラブが入閣するなら、ロッキード問題をきちっと指揮できる法務大臣でなきゃだめだと言って返した。そうしたら、田中六助さんが、田中派とは腫れ物にさわるようにしているので、これで新自由クラブを法務大臣にと言ったたら一発でだめになるから勘弁してくれと言い、あくまでも文部大臣でどうかと言うから、それは正式にお断りしますと言って断ったんだ。

そうしたら、どうするかという返事が来ないうちに組閣になって、記者会見で文部大臣は大平さんが兼務するという。それは明らかに新自由クラブに文部大臣のポストを準備しているんですよということとを世間に表現したわけだ。

しかし、なかなか決められず、伊東正義官房長官が、内緒で二人で会いたいと言って来られ、どうしても文部大臣はだめですかと言うので、こっちは法務大臣を発表してしまったから受けなと言ったら、伊東さんが、それは非常に難しいのもう一度大平に言いますが、できないかもしれないと言ったんだ。それで僕はすごく怒って、連立でやると言ったのに何だ、これは嘘なのかと言ったら、伊東さんもかっとなつて、大平はうそをつくような男じゃありませんと言われた。

数日間、文部大臣は大平兼務でやっていたところ、伊東さんがもう一度会いたいと言ってきて、都ホテルで内緒で会ったら、伊東さんが、大平は自分の信念を貫くつもりでいるから、ここは条件を呑

んで一緒にやってもらいたいと言うから、伊東さん、それは幾ら言われても無理だ、僕は党の代表として選挙をやったばかりですよ、選挙をやったばかりでそんなことはできませんよ。だって、大平を支持しただけでもぼろくそに言われているのに、ここで入閣したら、ポスト欲しさにやったんじゃないかと言われるから、幾ら何でも受けられないと言った。

伊東さんは、事ここに至ったら、もうこれ以上こちらもなすべがない、党内的にも全く無理だから、申し訳ないがお受けできない。本来なら大平がお詫びかたがた挨拶しなきゃいけないが、官邸から出られないので勘弁してくださいと言った。それで、もう勝手にしてください、私の方はそれを条件にやったわけでもないからと言って、それで終わりになったんです。

その後、すぐ伊東さんから連絡があつて、あした文部大臣を発表しますが、それを済ませたら大平がちゃんと挨拶したいので会ってほしいということになって、院内で党首会談をやつたんです。

メディアが写真を撮って退出したら、大平さんが、私はここで土下座するというわけです。河野さんが背負った支持者からの非難とかを考えると、私はその責任はどのくらい重いものかということがよくわかる。河野さん、私は一生をかけてこの御恩に報いるつもりだから許してもらいたい。大平さん、許す、許さないの問題じゃないですよ、政治的な問題だから、やったけれどもできなかったら、しようがないじゃないですか。いや、あなたはそう言うけれども、私はそう簡単にありがとうというわけにはいかないんだよ、一生をかけて償いますとかと言われた。

僕もそこでちょっと考えて、自民党の総裁が一生をかけて償うと言うんだから、何かのときに条件を言えるからいいかなと思ひ、連合政治を目指して一緒にやることにしましょうかと思ひ、別れた。ところが半年後に大平さんが死んでしまうんですよ。

○紅谷 そのときの自民党は、反主流派が田川さんの法務大臣には随分反発したということのようですが、自民党の主流派、反主流派の対立はどうなったのでしょうか。

○河野 組閣になったら大臣の数を分けて、それで仲直りしちゃうんだけれども、双方に不満は残ったんです。

それで、残った文部大臣を何派がとるかで喧嘩になった。我々も山口君の発案だつたと思つたけど、こつちから入ることはもうないから、我々が推薦する人を文部大臣にしろと言つて民間人を推薦して、その中から採つたらどうだという話をした。しかも、そのときは大来佐武郎さんが外務大臣で、この人は新自由クラブの公認で落ちた人だから、そうすると、この内閣に二人、新自由クラブが入ることになるんじゃないかという勝手な解釈をしていた。

だけれども、その文部大臣を巡って、宏池会の不満が強くなったんです。宏池会のポストをあけていたから、宏池会の中が収まらなくなつて谷垣専一さんになるんです。谷垣禎一さんのお父さんです。新自由クラブは、こちらの推薦した民間人も採らないばかりか、自分の派でポストを取るようじゃだめだなんて言っていた。

ようやく大平内閣はスタートしたけれども、最初からぎくしゃくして、半年たつたあたりでうちに不信任案が出て通つたんですよ。○紅谷 大平派の谷垣さんが文部大臣になって、連立構想は完全に消えましたが、それに関しては、新自由クラブの支持者やマスコミの反応はどうだったのでしょうか。

○河野 それからの一カ月ぐらいの新聞の論調のひどさ。裏切り者とか言われ、惨たんたる状況だった。新自由クラブの党内からも、この間まで言っていたこととどこでどう変わったのか説明してくれというので、全国大会をやつたり地方別に会議をして回つた。それは、直前の路線論争のときにも一遍やって、その後またやるわけだから、ちよつとしんどかつたけど、やらざるを得なかつたんです。

《大平内閣不信任決議案可決》

○紅谷 自民党の分裂騒動に始まった選挙後の国会は、与野党の対立が激しかったわけではありませんでしたが、会期末にいつものように内閣不信任案が提出されて、新自由クラブは乗るかどうかについて随分議論があったようです。

○河野 新自由クラブは不信任案に賛成したんですよ。だから、もうめちやくちやなんだよね。選挙で大平批判をして、総理指名では支持して、そして不信任案には賛成するんだから大揺れなんだ。その都度、真面目に考えてやってるけど、終わってみると、右に行ったり左に行ったり揺れに揺れて、だから支持者を振り落として走っているようなものでしたよ。

○紅谷 確かに、総理指名をした人の不信任案に賛成するというのは、よほどの事情がない限りは考えづらいですね。

中道でも随分話はされたようで、公明党は不信任案を出すことについては賛成していたのですが、民社党の春日一幸さんは、自民党で造反があるかもしれないから危ないという話をしていたようです。

○河野 あの頃は、中道四党首会談というのをやっていたけど、四党ともに党首と執行部とが違っていたんですよ。

公明党の竹入委員長は僕らととてもよくて、田中さんと悪くはなかったものの割と筋を通す人だったけど、矢野書記長は自民党に理解があったんです。民社党は、佐々木委員長は僕らと一緒にだけ、春日さんはこれまた少し違う。強いて言えば社民連の田英夫さんと阿部昭吾さんとかとは割合とよかった。

○紅谷 新自由クラブは、不信任案が可決されるという予想はされていたのでしょうか。

○河野 誰も可決されると思っていないんじゃないかな、誰もと言うとおかしいけれども。

○紅谷 おっしゃるとおりで、私は当時委員部にいましたが、事務方も可決されるのは全く予想もしていなくて、部屋で内閣不信任案が可決されるのをテレビで見ている、委員長と理事にサインをもらう書類があるものですから慌てて書いて、サインをもらうのに大慌てでした。

○河野 私も、会議が始まるころには、いつもの出すだけの不信任案だと思って、遊説で東京駅まで行っていたら、何かちよつとおかしいから戻ってくださいと言われて戻ったんだ。だから、ぎりぎり不信任案の投票には間に合った。

○築山〔衆議院事務局〕 空席が目立つ中で、明らかにこれは危ないのに何で突っ込んだのかなというのが非常に不思議で、普通は議場内交渉をやったりして、確認するはずですけども。

○河野 あそこでは党の国対も全然機能してないから、出席者を数えるとかなんとかいうのは全然できなかっただろうね。

○紅谷 どこもかなり混乱していて、福田派は出席して反対という方針でしたが、福田さんが本会議場に入れなかったり、中曽根派は途中で方針が変わったりしました。

○河野 中曽根さんは外に出てしまつて中に入れなかったんです。堂々めぐりしている最中までわからなくて、途中からこれはおかしいぞといつて、終わってみたら不信任が可決しちゃったんだ。

○紅谷 議場内ですからやり取りがわかりませんが、もう止められるような状況じゃなかったのでしょうか。

総選挙後に特別会が召集されて一週間余り首班指名ができず、迎えた最初の常会では内閣不信任案が可決されて解散という異常な国会で、議員の任期はわずか八か月でした。

○河野 これは異常ですよ。灘尾議長は苦労されたりうな。

それと、ちよつと人ごとみたいなことを言えば、やはり大平派、宏池会の国会対策というのが全然だめだったんですよ。あのころの

国会対策といえ田中派の人ばかりで、特に宏池会は、国対はもう一番苦手というか、やらないところなんだよ。

○紅谷 当時、宏池会というのは、お公家集団で国会対策は苦手だとよく言われていました。

○河野 そうそう、宏池会は、税調は一生懸命やっていたけれども、国対は全然やらなかった。

○清家〔衆議院事務局〕 やはり国会議員としては国対をよく勉強し、汗をかく必要があるというお話でしたが、先生からご覧になられて、国対というのは何を学べて、それを生かす方法は何だと感じられたでしょうか。

○河野 国会対策をやっていると、国会にいる時間が長くなりますが、それはとても大事だと思いますね。

国政の主戦場は国会の委員会であり本会議です。国会議事堂の中に長くいると、政治の流れを肌身で感じる。こうなっているなどか緊迫しているなどが分かり、それが非常に大事だと思いますね。

例えば浜田幸一さんという人は、国会が好きなんです。国会にいる時間がすごく長い。だから、いろいろなことも覚えるし知るから、彼は党本部へ戻ってきてても強いんですね。今が何だということを一番よく知っていた。

文教委員会で、僕が当選二回で委員長代理になって強行採決をやったら、浜幸さんが飛んできてくれて、私がいるから大丈夫ですと言ってくれましたよ。

○紅谷 浜田先生は、私が予算委員会担当で、売上税問題のときの予算の理事だったのですが、強行採決になったら、部屋の後ろの方にいたのがいつの間にか委員長席まで来て、委員長の砂田重民さんを守っていましたね。

○河野 どこからか突然現れるんだよね。本当に不思議な人で修羅場は手慣れたものでした。

とにかく、自民党というのは多士済々いろいろな人がいて、いろいろな考え方を自由に言えたんだよ、僕らはめっちゃくちゃだったけれどもね。

○紅谷 自民党の派閥は、右から左までの幅広い意見があって、いろいろな考え方があるんだというのがわかりましたけれども、最近はそのような幅広い意見が余りないように感じるのですが、いかがでしょうか。

○河野 そうですよ。だから、いろいろな意見があっても、あの人は清和会だ、あの人は宏池会だとすぐわかった。具合が悪かったら清和会の誰とかに言えば大体収まりがつくなというのがあった。僕は中曽根派にいたときには勝手なことを言うだけ言って、それで最後は、稲葉修さんとか大石武一さんとかに呼ばれて、おまえ、もういいかげんにしろと、はい、わかりましたと収まったことがある。そういう派閥の主張と仕切りがあつたんですよ。

昔は派閥の親分が若手を連れて全国を演説して歩くんですよ。僕は中曽根派だけど、大平さんが東北遊説に行くときに、派閥が違うのに一緒に連れていかれて、移動中の汽車の中で大平さんがいろいろな話をしてくれ、そういうものかなと思いつながら、東北を何カ所か回って帰ってきたことがある。その後少したって、福田赳夫さんから、北海道へ遊説に行くんだが一緒に行かないかと誘われ、羽田空港に行ったら、お供は僕と山村新治郎さんの二人で、中川一郎さんの応援に行ったんだよ。

だから、そういうところは派閥なんか関係なく、派閥の親分が若手を連れて、いろいろなことを話をしてくれたりしていた。

橋本龍太郎さんがよく言っていたけど、初めて社会労働委員会で質問をしていたら、河野一郎がずっと後ろで立って聞いていて、終わって廊下へ出たら、いい質問だったなと、おまえのおやじに褒められた。だけど、左手をポケットに入れているのは止めた方がいい

と言われた、そんなところまで先輩が注意をしてくれた、そういうことがあったらしいんだ。

僕は交通安全対策特別委員会で初めて質問したんだけど、竹下さんが会議録を十部ぐらい選挙区に配ったらどうだと、印刷したのを届けてくれた。竹下さんは、聞いているわけじゃないけれど、やはりああやられると、ほろっとするよね。

《党勢の復調と国会活動》

○紅谷 大平内閣不信任決議案は五月十六日に可決されましたが、解散は三日後の十九日でした。内閣不信任案可決当日に解散しなかったのは初めてなのですが、これは参議院選挙の日程が決まっていた、六月二十二日に同日選挙を行うためでした。前回の選挙から八カ月弱ですから、候補者はいるのでしようが、参議院と同日選挙ですから組織や財政面もさることながら、前国会での経緯もあって大変な選挙だったのではないかと思います、いかがだったのでしょうか。

○河野 前の選挙で大敗した後に田川さんが全国を回って歩いて、次点だった人達を激励すると、悔し涙をばねに頑張ったんですよ。

世間では、風に吹かれて通ったり落ちたりするのはだめだみたいと言うけれど、初めはまさに逆風だったんですよ。物すごい逆風にさらされていたけれども、あの八カ月という短い期間にみんなの努力で追い風が変わったんです。それで現職の全員と落選していた人のうち八人が当選したんです。大平さんが選挙の最中に亡くなってしまったのには本当に驚きました。僕は大平さんを吊問しようかどうかしようか大いに迷ったけど、選挙で敵対しているところへのこのことお悔やみに行くことはできないと心に定めて、徹底的に戦いました。自民党は完全な分裂選挙の様相だったのが、途中から黒いリ

ボンをつけて吊いだと言いつし、あつという間に一つにまとまった。しかもダブルだから自民党は両方とも大勝し、野党は徹底的にやられた。そんな中でよく我々は生き残ったと思いますよ。

○紅谷 自民党は過半数ぎりぎりだったのが一挙に三十ぐらい増やす、社会党は変わらずで、公明党が二十五減らし、民社党も減らす、共産党も十数減らすという結果でした。

参議院でも自民党は過半数を獲ったので、ここ何年かの与野党伯仲状況が一挙に解消しました。

○河野 自民党以外で勝ったのは僕らだけで、不思議な選挙でした。しかも大平さんが亡くなったから、八カ月前には連立と言っていたのが、もうお呼びでないという感じだった。僕らは八人増やしたことは間違いないけれども、結党当初の十八人の頃が忘れられなくて、やはり国会は数だということで、社民連との連合になっていくわけです。

○紅谷 自民党が大勝したので、中道勢力の結集とか、国会の対応をどうしていくのか目標を失ったようにも見えますが、新自由クラブはどういう方向性で進もうとされたのでしょうか。

○河野 そこは、すっかり目標を失ったという感じでしたね。

最初の選挙では第二の保守政党になろうという目標だったけれども、西岡離党で夢が破れ、次の選挙では四人になる。その後十二人に増えるけれども、最初の頃の勢いは全然なく支持率も下がったので、田川さんが、もう一回足を地べたにつけて組織づくりからやらなきゃだめだ、上を向いてああだこうだ言っているのはだめだ、地道にやろうという話になったんです。

一方、参議院では新自由クラブの当選者は誰もいなくて、当選は推薦した東京の宇都宮徳馬さんと大阪の中村鋭一さんだけでした。

○紅谷 衆議院も参議院も自民党が多数になり、中道勢力は対抗策として、公明、民社、新自由クラブ、社民連で連合的な会派をつく

ろうという話があったようですが、どの程度の話だったのでしょうか。

○河野 やっていたけれども、それは政権を目指すとかではなくて、むしろ自分たちが生き残ろうということですよ。その頃は、何だかやたらに公明党と民社党は近かったんですよ。僕らは数が少ないのでどうということはなかったけど、公明党と民社党はそれぞれがメリットがあるという話で、民社党は公明党の組織、何よりも新聞を毎日出せるのがよいと、公明党は選挙で増える余地が余りないから、民社党が増えることを期待した。しかし、竹入さんと佐々木さんが委員長でしたが、民社党は春日一幸さんの影響力が強かったんですよ。多少冗談もあったけど、公民合併というのがあるんじゃないかと、僕らはちよつと思つた時期がありましたね。

○紅谷 選挙後の総理指名では、宏池会の鈴木善幸さんが選ばれて、鈴木内閣が発足しました。

○河野 鈴木さんは調整型の人だったので、ふわつとした政治でした。

その頃から、中曽根さんは政権を目指して跳んだり跳ねたりしていたけど、まだ田中派の影響力が強かったから、そう簡単に中曽根というわけにはいかないんです。

それで、鈴木内閣の間に中曽根さんはさかんにいろいろなことをやった。行政管理庁長官で専売公社の改革をやり、その後の国鉄改革、そして土光臨調に繋がっていく。何とか田中派の了解をとりたいたということ、田中さんとの関係を一生懸命繋ごうとしてやっていったけど、僕はそれはわからなかったんだよね。

鈴木さんが一年で辞めた後、中曽根内閣になって、後藤田官房長官というので、中曽根内閣というけれども実際は田中政権じゃないかという話を僕はしていましたよ。

○紅谷 そういう政治状況の中で、先程お話にありましたが、新自

由クラブは、社民連と統一会派を結成されます。当時の社民連は、榎崎弥之助、阿部昭吾、菅直人、参議院は田英夫、江田五月の五人です。参議院は旧知の間柄の人たちですが、衆議院の方は政策的に合うような関係だったのでしょうか。

○河野 阿部昭吾さんという人は比較的穏健な人だったけれども、榎崎さんは左寄りだし、菅さんという人は誰も知らなかったけれども、江田さんが菅君の上に乗っていたので、組織的にはいいんじゃないかということだったんです。院内会派をつくって数を増やして発言時間を少しでも長くしたいという話ですよ。だけれども、それは結果的に失敗で、やらなきゃよかったという話になるんです。

その頃は、自民党から出た新自由クラブと社会党から割れた民社党があつて、民社党の方が自民党に近くなって、新自由クラブの方がどっちかといえば社会党に近くなって社民連と仲よくなるという、クロスしているみたいで余り本筋の話じゃなかったし、そんなに一生懸命でもなかったんです。

○紅谷 社民連との交渉は、山口さんや柿沢さんが行っていたようですが、政策的な合意はしていたのでしょうか。

○河野 そのとき僕は無役だったけど、全然していなかった。参議院には柿沢君がいて、彼は割と保守色を大事にしていて、選挙に出るときには相当リベラルだったんです。社民連との統一会派を彼が政策委員長でまとめたんだけど、何故かその直後に離党してしまつたんです。

柿沢君は、新自由クラブは都市型にならないと生き残れないと言ひ、社民連とはそこでは一致していません。ただ、安保、防衛ではやはり保守的で一致できなくて、最後は山口君がもうごちゃごちゃ言うなという話でまとめたと思うんだよね。

その翌日、彼は離党届を出した。この頃は党の組織がもうめっちゃめっちゃだったね。

○紅谷 先ほど院内会派での数の話をされましたけれども、社民連と統一会派を組んでも十五人ですから、会派としては共産党の二十九人の次で、統一会派にどういうメリットがあったのでしょうか。

○河野 院内でのメリットはなかったけれども、次の参議院選挙に繋がっていくと思っていまして。

統一会派の名前をどうするか、比例名簿で田英夫、大石武一、他にもいたけど誰を比例の一位にするか、誰を東京に回すかでもめってしまった。

社民連は、会派の名称を新自由連合とか、社民クラブでどうかとか言ってきた、最後は新自由クラブ・民主連合になって、統一会派で選挙もやっちゃうわけだ。その結果、地方では悪評で、社会党か自民党かわからないようなのはだめだと物すごく叱られた。それで選挙も負けて統一会派は解消したんです。この頃が一番党として何だかわからない時期でした。

《中曽根内閣との連立》

○紅谷 新自由クラブにとっては混乱の時期だったようですが、昭和五十八年十二月に総選挙になります。ロッキード選挙と言われた選挙で、自民党は公認候補だけでは過半数が獲れず、追加公認でようやく過半数を確保しました。

新自由クラブは十二人から八人に減ってしまいました。ロッキード選挙と言われていましたので、増えてもいい選挙だったと思うのですが。

○河野 中曽根総理での解散で、倫理、倫理とスズムシみたいなやつらだとかとひどいことを言われた。そして自民党が減ったのと同じように新自由クラブも減っちゃったわけだ。

○紅谷 自民党は過半数を確保したとはいえ、国会運営は不安定で

すから、新自由クラブに連立を呼びかけてきますが、その前に、中道保守の大連立構想で河本敏夫さんを担ぐという話が出ていたようですが、どういう経緯だったのでしょうか。

○河野 自民党は選挙で大敗して完全に過半数を割ってしまった。選挙後すぐに、田中六助幹事長が力を貸してくれと言ってきたけど、どういう意味かわからないんだよね。つまり、復党と言っているのか、統一会派と言っているのか、あるいは連立内閣と言っているのか、わからないんですよ。

大平内閣のときに、連立の話がぎりぎりのところまでいって壊れたいきさつがあつて、今回の選挙では十二人から八人に減らした中で、そういう話を持ちかけられたけれども、正直、中曽根さんが頭目ではそれじゃという気分じゃなかったんです。中曽根政権を選挙で猛烈に批判して戦ってきましたから、何よりも中曽根政権に入るのは絶対嫌だという思いが田川さんと僕にはあつたんです。

そこで、田川さんと山口君とどうするか話をしていたら、田川さんが、もう一回何か仕掛けをやるんじゃないかという話になって、河本擁立がいいんじゃないかというので、じゃ、やってみようという事になった。

それで、田川さんが河本さんと割と近かったので、河本さんにやらないかと言ったら、あの人はとても口が重くて余り話さないけど度胸はいいし腹が据わっているから、やる気になればやるかもしれぬと。どうやってやるかというのを田川さんが説明をして、あなたがやると言ってくれば自民党は過半数割れだし、こつちには河本さんが連れてくる三木派もいるだろうし、野党は全部まとめるという話になった。河本さんは、そんなことができずかというので、野党に話をしてみてそうならあなたの手を挙げるかと言ったら、そういう事態になればという話になった。それで田川さんが社会党の石橋委員長と話をし、最初は河本が自民党を離党すれば支持する

という話だったけれども、田川さんが、そこまでは彼は踏み切れな
いと、そこは結構厳しいやりとりだったけど、最終的には石橋さん
は腹をくくるだろうと田川さんは思った。

公明党と民社党は、田川さんが僕にやれと言うので、僕は竹入さ
んと佐々木さんと話をして、本当にできるのか、やるなら俺らはい
いよという話だった。共産党は声をかけなくても後からついてくる
だろうから声をかけない。

そうして、社会、公明、民社、社民連をまとめて、河本さんに話
したら、彼はふっと気がついて、三木さんの許しがないとできない
と言うんです。

そこで僕は一人で三木邸へ上がり込んで、絶対やろうと言って口
説いた。いいような悪いような、はっきりしなかったけど、最終的
には、やれるものならやってみようかみたいな話。でも、一番最後
になって、三木さんが降りちやうんですよ。

話が漏れて、中曽根総理以下がなんとかしなくてはということに
なって、最終的に中曽根さんが田中さんを名指しで批判する文書を
書いて、そうしたら三木さんが、そうなった以上は約束だから降り
ると言って、降りちやうって大失敗。

一番の失敗は、河本さんを擁立しようとして田川さんと二人で話をし
て、また二人で走るといけないからと山口君に話したことだった。

彼はいいんじゃないか、俺は邪魔は絶対しないかわりに、河野さん
この計画が潰れたら次は私にイニシアチブをくれ、私がやりたいこ
とをやらせてくれ、という話になったんです。

○紅谷 中曽根総理の文書というのは、田中元総理の政治的影響を
排除するという内容の総裁声明ですか。

○河野 そうです、声明に田中排除を入れるんですよ。

最初は田中政治というのを書かないんですが、三木さんが田中と
名指しでちゃんと書け、田中政治を排除しろと言って、最後は中曾

根総理が書いたものだから三木さんは反対できなくなった。河本さ
んから、三木さんが降りましてと電話があり、それで終わりになっ
てしまった。

何回もそろばんで足し算をし、微差だけでも絶対勝てるという
話で、社会党も首班指名で名乗りを上げれば乗るといふ話になった
のに、それもできなくなり、政治の流れが変わる大きなチャンス
を逃してしまっただけです。

河本擁立が失敗したら、山口君が、それじゃ約束だから後は私に
任せてくださいと言うので任せたら、その足で中曽根さんと連立の
話に行っちゃうわけだ。田川さんと二人で中曽根倒閣運動をやって、
それが失敗すると今度は中曽根連立に行くんだから、自民党もびっ
くりしたと思うよ。それで連立の話になるわけです。

田中六助、山口という連係プレーで、連立の約束を取り付けてき
たと山口君が帰ってきて、新自由クラブは自治大臣、国家公安委員
長で入閣だと言うんです。

僕らは、新自由クラブが入閣する以上は田中追及をやるんだから
法務大臣でなきゃ絶対だめだと言ったら、山口君が怒って、俺がこ
れだけ一生懸命やって自治大臣をとってきたのに、法務大臣ならよ
くて自治大臣ではだめという理屈がわからない。どっちだって連立
に変わりはしないじゃないかと聞き直られ、しようがないから、最後
はそれでいこうというので、自治大臣、国家公安委員長で田川さん
が入閣するんです。

けれども、田川さんは、第一次中曽根内閣のときの代表質問で、
中曽根さんのことを物すごく攻撃しているんですよ。僕が聞いても、
背筋が凍るような質問をするんだ。中曽根さんが、松村謙三さんを
師と仰ぐとか一番尊敬していると言うと、田川さんは松村さんの秘
書だったから、そんな事は嘘だと言って、本会議での発言が、すご
かったんですよ。その人が中曽根内閣に入閣するのだから大変だっ

たと思う。

予算委員会では与野党から連日の田川攻撃、新自由クラブ攻撃ですよ。何で入ったんだ、今まで言ってきたことと違うじゃないか、選挙のときに言ったのと違うじゃないかと集中攻撃。田川さんは相当辛かったと思うんですよ。

○紅谷 その後の内閣改造で、田川大臣から山口大臣になりますが、そのときもいろいろあったようですね。

○河野 そうなんですよ。

第二次中曽根内閣の最初の改造で、田川さんは自分が辞めた後は僕にという話だったけれど、山口君が、これは俺が作った連立だから、次はどうしても俺にやらせてくれという話になって、多少もめた末に山口君が入閣するけれど、はじめは科技庁長官だったのが、大臣でなきや嫌だといっごねるんですよ。

僕が代表だったから、手続きとして総理官邸へ行って中曽根さんに連立を継続しましょう。ついては山口君を新自由クラブからとってほしい。できレースだから、中曽根さんもそれでは科技庁長官と言ひ、僕は結構ですと言つて総理執務室を出ようと思つたら、山口君が同席していた金丸幹事長をつかまえて、どうしても大臣にしろとごねるんです。金丸さんも面倒くさくなって、竹内黎一さんの労働大臣と科技庁長官を取り替えることになったんですよ。

田川入閣のときには、新自由クラブが喉に刺さった小骨みたいな感じだったけれど、山口君が大臣になったら、すっかりとげがなくなくて、中曽根さんは物すごく気に入ってべた褒めですよ。

○紅谷 自民党との連立政権は、大平内閣では実現しなかったの、保守合同以降では初めてでしたから、意義があったと考えられたのか、また三年ほどの連立でしたが、新自由クラブに変化はあったのでしょうか。

○河野 自民党の単独政権を終わらせたということだったんです。

新自由クラブ結成前から国会議員活動をしているのは田川、山口、僕の三人だけで、他は新人です。つまり与党がどういうものかというのを全く知らない人たちがばかりだったのが、ここで初めて与党になり、与党つてやはり楽だな、おいしいなということを感じるわけです。それで、急速に党全体に復党願望が出てくるんです。僕は、この辺はしみじみわかっていました。何をやるにしても、やはり自民党はいいなという感じが出てくる。それと同時に、自民党から戻ってこいという話もあって、それはそうだなという感じが日に日に強くなっていくんです。

連立を組んで、僕ら八人が参加したから、予算委員長や各委員長をほとんど取つて、自民党にしてみればとても安い買物をしたような感じですよ。田川さんだけが閣内でいつも渋いことを言うから、それだけが嫌だったろうけれども、全体的には自民党にとつてとてもいい方向に流れていたんですよ。

○紅谷 河野先生は、昭和六十年十二月の中曽根改造内閣で科学技術庁長官として初入閣されました。

昭和六十年という初当選から約二十年で、自民党の同期の中でもほぼ最後の方の入閣でした。大臣就任に際しては、どういうお気持ちだったのでしょうか。

○河野 中曽根さんとの関係がいいような悪いような関係だったもの、ですから、この入閣は余り嬉しくなかったんです。しかし、選挙区の人達が我慢できないんですよ。選挙で担いでも自分勝手に飛び出してあっち行ったりこっち行ったりして、みんな大臣になつていけるのうちの大将だけはならないと。それは僕としても本当に地元で申し訳ないことで、地元の後援会長が矢面に立って一生懸命抑えてくれていたけれども、もうこれ以上は抑えられません。これでまた、みんながやれと言うのに、あんたがいい恰好していたんじゃない、選挙区がもちませんよと言われ、もうしようがないかなという感じは

ありました。もう一方では、今言われるように、僕が同期で一番最後の最後に残ったので、もうそれはやらなきゃだめだなという気もしていましたね。

しかし、僕が科技庁長官だということで、科技庁はみんながっかりするんですよ。その時、科技庁は二つの大きな法案を抱えていたんです。一つは、高レベル放射性廃棄物をどこかに埋めなきゃいけないという原子炉規制法、もう一つが研究交流促進法。科技庁は、河野長官では一年は寝ているしかないという話になった。そこへ福祉党から移った八代英太さんが政務次官ときたから、これは全然だめだとすっかり意気消沈してたんなんです。

そうしたら、科学技術委員会の委員長が大久保直彦という公明党の国対委員長で、早大の同級生だったんです。割と仲がよかつたけれども、議員になってからはほとんど付き合つたことはなかった。

大久保が来て、おい河野、おまえはいいところの大臣になったよ、俺が全部やるから任せろと言うんです。任せるも何もわからないんだからみんなやってくれと言つたら、彼が全部やってくれて、法案は二本とも通つたんです。科技庁は、どうしてこんなにうまくいくのかわからないとびっくりしていましたよ。

○紅谷 当時、私は科技特と同じ部屋の建設委員会の担当にいましたので、少し経緯は聞いていました。確かに原子炉規制法というのは、放射性廃棄物を青森の六ヶ所村に埋設するという内容の法案で、社会党の反対が強く、青森の関晴正さんが委員にいて、特に強い反対だったと記憶しています。

○河野 そうそう、関さんが絶対反対だった。大久保君に言われたりして、僕は関さんの青山の議員宿舎へ一升瓶をぶら下げて行って一晩一緒に飲んだことがありますよ。話をすると浪花節みたいな人で面白いけど、翌日委員会に来るとがらっと人が変わった。科技庁の役人たちはみんな逃げて歩いたんだ。

六ヶ所村ともう一か所北海道にも候補地があつて、それが五十嵐広三さんの選挙区で、あの人もここにこしているのにすごかつたんだ。その二人が厳しく言っていたけど、なんとか法案が通つたのは、ほとんど大久保君のお蔭でしたね。

五月の連休は大臣がみんなヨーロッパとかアメリカへ行くと言っているけど、こっちは何も声もかからなきゃ構想もないんだよ。そうしたら大久保君が、連休はどうしているんだと言うから、くたびれたから家に帰って寝ていると言つたら、おまえ、こんないときはないんだと言つて、科技庁の官房長を呼んで大臣の外遊計画を作れと言つて、オーストラリアへ会議に行くことになった。一週間の予定で支度したら、行く数日前にチェルノブイリ原発が爆発して、北欧の国が大気が汚染されていると騒いでいるけど、ソ連に聞いても何もないと言つてばかり。そのうちに、チェルノブイリの原子炉が爆発したらしいという話になつたけれども、もう明日の朝の飛行機に乗らなきゃいけないとなつて、後藤田官房長官に電話をして、日本にいなきゃ具合が悪いでしょうねと言つたら、会談の相手も決まつているんだらうから行つて、何かあつたら連絡するから戻つてくれればいいというんです。

それで飛行機に乗つてシドニーに着いたら、空港に総領事が来て、すぐお帰りくださいと言つた。そう言われても日本に帰る飛行機は明日までないからどうすることもできず、とりあえずキャンベラへ行って大臣に会つたけれども、それは、翌日会う約束だったのを繰り上げてもらつて挨拶だけだった。次の日の朝、シドニーまで戻つて日本へ帰つてきた。何にもしないで、十何時間飛行機に乗つて帰つてきただけでした。

○紅谷 大臣就任の半年余りの間に、チェルノブイリ原発事故の他に、アメリカのスペースシャトルの爆発もありましたから、大きな事故が二つあつたわけですね。

○河野 僕が大臣の時に米ソ巨大強力国の一番大きなプロジェクトがぶっ壊れたんだよ。

アメリカのチャレンジャー号というスペースシャトルが爆発したときも大変だった。打ち上げをテレビでみんなで見ている、打ち上げたと思ったら爆発して、もつと行くのかと思ったら落ちてくるんだよ。全員即死だから、アメリカは本当にみんな悲しんで元気がないんだ。

それで、葬式に行った方がいいんじゃないかと思ったけれど、予算委員会の初日に新任大臣がいないのはまずいんじゃないかという話になった。それでも後藤田官房長官が行けと言うので、葬式をどこでやるのかもわからないのにアメリカに向かって飛んだんだ。ロサンゼルスに着いたら総領事から、テキサスのヒューストンの打ち上げ基地に行ってくださいと言われて向かいましたよ。

葬式に出てとんぼ帰りで予算委員会の初日の朝に帰ってきて、ぎりぎり間に合いましたね。

○紅谷 先程から名前が出てきますが、官房長官は後藤田先生でした。私の学生時代でしたが、徳島では三木先生との争いがあった。阿波戦争と言われ、三木派と田中派の激しい政争があった、後藤田先生は剛腕という印象でした。

しかし、いつからか後藤田先生の印象が随分と変わったように思いますけれども、河野先生から見た後藤田先生の印象はどうだったのですか。

○河野 僕は、三木さんとは親しくて、時々三木邸へ行ってお茶を飲んだりしていたから、三木さんから参議院選の阿波戦争だから手伝いに行ってくれと言われ、また坂本三十次さんが一緒に行くこうと言って、後藤田攻撃に随分行ったんですよ。そんなこともあって最初は田中派だし余りいい印象じゃなかった。いい印象じゃなかったけれども、とてもフェアな人でした。いい悪いが非常にはつきり

していて、だめというときはだめだし、いいときはいいし、話をするようになって途中からは結構かわいがられたね。

僕が中曽根内閣の閣議でいろいろなことを言うと、その話は官房長官室で聞くから後で来いと引き取って、行くと俺も君の意見に賛成だけど、総理の顔も一応立ててやってくれよなという話を何回もされた。

僕が憲法記念日でお祝いをやらないのかと閣議で言ったら、中曽根さんは嫌な顔をしていた。それも後藤田さんが引き取って、俺も憲法記念日ぐらいやったらいいと思っているけれど、三木内閣のときの憲法記念日のお祝いは三十年だろう、普通は三十年の次は五十年じゃないかと言われて終わりになったんだ。僕はしょうがないから自分で勝手にやった。

ちょうどこのころ、中曽根さんがペルシャ湾へ掃海艇を出すとかいう話になったけど、後藤田さんが止めたりしてね。後藤田官房長官の存在感というのはすごくありましたね。

後藤田さんは、本当に信用して話ができる人だという印象を持つようになりましたね。

《防衛費対GNP比1%枠》

○紅谷 防衛費の対GNP比1%枠については、三木内閣のときに閣議決定しました。自衛隊ができて、どんどん防衛費が膨らんでいったものから、田中内閣のころからの懸案で、それがまとまっていたのが三木内閣でした。ところが、中曽根内閣のときに方針を変えて1%枠を撤廃しました。当時の中曽根総理とレーガン大統領との関係があって、アメリカからSDI戦略防衛構想などの強い要求があったためと言われています。

新自由クラブは、自民党と連立を組むにあたって、政策協定で一

○紅谷 今の1%枠もそうですし、SDI構想についても、国会の宇宙利用の決議との関係、これは昭和四十年代ですが、国会決議の存在を知らない人が多くなったのでしようね。

○河野 国会決議というのは、一回決議をしたらどこまで効力があるのかというのは、なかなか微妙ですよ。だから、同じ決議を繰り返して繰り返してやっているのもあるし、それから、一回本当に大変だというときに国会決議して、それが終われば、もうその決議はなくなってしまうようなものもある。

○紅谷 国会決議の効力という観点からは、国会決議というのはずっと生きています。ただ、それを変えるような法律改正があった場合や、それを変更する新たな国会決議があった場合は、前の決議は変更されたという解釈で、いくら古かろうが変えない限りは生きていくというのが基本です。

○河野 本来そうですね。政権が替わったときに、米の輸入自由化反対についての国会決議があったから、ウルグアイラウンド協定に反対したんだよね。

いろいろ言うけれども、中曽根政権下では結局足元を見られちゃって、やりようがなかったんですよ。それで、山口幹事長だったから、党対党ではなあなあになって、後半はだめだと肌で感じていましたね。

○紅谷 今の防衛費の1%枠もそうですし、SDI構想、それから武器輸出三原則も、アメリカについては例外とするというのが中曽根内閣のときでしたから、新自由クラブとしてはつらい時期に大臣をされていたのかと思います。

○河野 とてもつらい時期でした。だめなら野党に戻ればいいとはいかなくなっているんですよ。田川さんのころは、俺は辞めて野党に戻る、連立破棄だという勢いだったけれど、それが、辞めて帰ると言っても、母屋の方がそんなのはだめだと言うから、本当にこの

頃が辛かった。

それで、六十一年の七月まで連立はやったけれども、七月の選挙で新自由クラブは二人減って六人になる。何より選挙で戦えないんですよ。

僕は、本来連立というのは国会が解散したら一遍解消して、選挙では自分の党の政策を主張して戦わなきゃだめだと言っていたけど、うちの連中は、そんなことをしたらそれで解消して終わりになっちゃうといけないうから、解消は絶対しないというんだ。

僕が選挙の前半で中曽根批判をしたら、中曽根内閣の閣僚が中曽根批判なんかして何だと言われた。しかし、中曽根政治はいいと言ったら、新自由クラブに投票する必要はなく、直接自民党に投票した方がいいということになるから、本当に存在意義がないわけです。

《新自由クラブの解党》

○紅谷 その頃、国会では定数は正問題が懸案になっていました。ずっと議論していたのですが、なかなか話がかかれない。それは、中曽根総理が解散して同日選を考えているんじゃないかという憶測があつて、野党がそれについて警戒感があつたものだから、なかなか進まない。しかし、坂田議長から八増七減の調停案が出され、与野党とも受けざるを得ない状況になったという経過でしたが、新自由クラブは反対だったようです。

○河野 それは、九増になれば横浜が一人増えて、新自由クラブの新堀典彦さんが当選すると思っていたのに、どうも新自由クラブが増えるだけだからやめちゃえというので、横浜だけ削られたんですよ。新堀さんはチャンスを失い、新自由クラブとしては党内の混乱を収めるだけでも大変骨が折れたんです。

あの頃は、何人かが集まって候補者の顔まで見ながら増やすか減

らすかとやって、こっちは損だからやめようとかという話になるけど、新自由クラブはその輪に入れないんですよ。結局最後は、あいつのところなら切ってもいいみたいな話になった。

その一方で、中曽根さんは衆参ダブル選挙をやりたくてしようがないんですよ。それで死んだふり解散、俺は絶対にやらないみたいなことを言っていたけれど、実は着々と準備が進んでいて、坂田さんも結局乗せられたような格好ですよ。

○紅谷 議長の調停案が出て与野党が受けた段階では、自民党の中でも宮沢総務会長は同日選には反対でした。

○河野 絶対反対だった。珍しく総務会で頑張ったんですよ。

中曽根総理は、そこでも最後に、私の顔を見てください、私が嘘をつく男に見えますかと平気な顔をして言うんだから、嫌になっちゃうよね。

○紅谷 そういう経緯でしたから、解散は野党の反発がとて強く、本会議ではなく、坂田議長は議長応接室に各党代表を集めました。野党は出席せず、自民党と新自由クラブの代表者の前で解散詔書を読みあげたという、国会史上例のない解散でした。

そして、衆参同日選挙に入っていくのですが、先ほどお話がありましたように、連立内閣を組みながらの選挙戦ですから、内閣批判はできない厳しい選挙でした。

○河野 どこもかしこも八方塞がりの厳しい選挙で、演説ができません。演説のしようがないんですね。

選挙中に新自由クラブ結党十周年をやるうと言うので、小杉隆君の選挙区の三軒茶屋で、宣伝カーの上で十周年の演説をやったんです。結成一年目、二年目というのは、人が集まって整理に困るほどだったのに、幾ら結党十周年の記念日とか言って演説しても人がいなくて辛かった。

そのときにつくづく、これはだめだ、もう党としての意味はない

と思いましたが。以前は、新自由クラブ推薦というとその候補者の票は増えたけど、そのころは、新自由クラブというむしろ候補者の重荷になって、もう党としての意味がないと、選挙で演説しながら、これはだめだと思いました。

それで選挙が終わったら、即刻、連立解消という話ですよ。僕らの方からは、解消しても閣外協力しようとかという話が多少あったけど、自民党からはもう結構です。

○紅谷 それは当時の河野代表と山口幹事長の対立があったということですか。

○河野 あったんです。山口君はあの頃はほとんど中曽根派だったから、解消しても閣外協力しよう。彼はとうとう閣外協力で押し通して外務委員長になるわけですよ。

連立を解消して僕らは小さくなって戻ったけれども、彼だけは外務委員長をやって、こっちはびっくりしていたね。

○紅谷 選挙の話に戻りますが、新自由クラブといってもなかなか人が集まらないというのは、御自身の選挙でも感じられたのでしょうか。

○河野 それまで選挙をやれば大体一番だったけど、僕はこの選挙では二番でした。このときは本当に辛い選挙だった。

○紅谷 選挙では、自民党は三百人以上当選して大勝でしたから、連立を組む必要がなくなりました。

新自由クラブは八月に解党を決めますが、自民党に戻るといって決断もしなくてはいけませんでした。

○河野 そうでした。正確には自民党に戻ったのは僕と山口君だけで、新自由クラブになってから議員になった鈴木恒夫、甘利明、小杉隆の三人は、自民党に入党するという格好です。田川さんは絶対帰らないと頑張った。

復党のときには、自民党からいろいろなことを言ってきた。僕が

中曽根内閣に入るときにも、河野の入閣については復党が条件だみたいな話があつて、僕は復党が条件の入閣ならお断りしますと言つて、大げんかになつたことがあつたんですよ。劇団四季の浅利慶太さんが僕と中曽根さんの間を盛んに行つたり来たりして、中曽根さんは復党条件の入閣だというから、浅利さんに、そういう無礼なことを言うなら二度と話をしないと云つたら、浅利さんは、本当かどうかわからないけれども、私も腹を決めて、あんたとは二度とつき合わないと言つて中曽根と談判してきたと言つていた。結局、その話は一切なかつたことにして入閣してくれという話になつたけど、そのころから浅利さんは戻れという話をずっとしていたんです。

バッジを付けた人で僕に復党しないかと言つてきた人は一人もいないんです。強いて言えば、そろそろ戻つてほしいと藤波君は言つてきた。あとは浅利、牛尾、そういうバッジを付けていない人たちが、とにかく中曽根もそう言っているからみたいなきことをしきりに言つてきたんですよ。

それで、僕が絶対だめだと言つるので、浅利さん、牛尾さんは専ら田川さんのところへ行つて、河野を帰せと言つていたんです。田川さんが僕に、君の今後の残された政治生活の後半を考えるともう時間的余裕はないから帰れ、帰るなら今しかないんじゃないかと。いや、俺は絶対帰らぬと。それで途中から田川さんも、一遍帰つて出直そうじゃないかという話になつた。

そうしていると、ある日突然、君は帰れ、だけど俺は帰らぬと言ひ出したので、私が帰つてあなたが帰らないなんてそんなばかなことではないので、田川さんと一緒に帰るけれども一緒にやなきや帰らないという話になつた。

結局、最後まで田川さんは絶対帰らないと言ふ。それは、全国に支部を作つて活動をさせて、市議員も何人かいるのに、それを全部置いて自分だけ帰るなんてことはできないだろうと。君と一緒に

帰る仲間の面倒を党内で見なきやいけないだろうから帰れと。これは帰る日の朝まであだこうだやつたけれど、結局、田川さんは絶対帰らないと言ふので、諦めて最後は帰つたんです。

○紅谷 自民党を出るときにも決断をされましたが、戻るといふ決断は、より一層大変ではなかつたのでしょうか。

○河野 自民党を離党する最後のときに、宮沢さんに離党することになりましたと言つたら、宮沢さんが、あなたが熟慮の上お決めになつたんだからそれはそれで結構、私は何も言うことはないけれど、出るの簡単だけれども戻るのは難しいから、そのことをよく考えて最後の決断をしてくださいと、さんざん言われたんです。

そのときは、戻るわけないんだから心配しなくても大丈夫ですとか言つたけれど、やはり戻るのは難しい。本当に、物事を始めるのは簡単だけれど、手じまいというか、後始末は本当にエネルギーは倍かかりますよ。

○甲賀〔河野事務所〕 我々事務局が知つたのは、昭和六十一年八月十一日で、テレビを見ていたらテロップが流れて、新自由クラブが解党。それから四日後の十五日には党大会を開いて閉じましたから、あつけないなと思ひました。でも、今おっしゃられたように、結局、残務整理が九月から四カ月かかりました。

その残務整理した資料は、ほとんど国会図書館に寄贈しました。○紅谷 河野一郎先生は、一旦は新党結成の決断をされましたが、その後とどまるという決断をされました。

河野先生は、自民党を離党して新自由クラブを結成されますが、自民党に復党するという決断をされることになりました。

○河野 そう言つちやなんだけれども、父が軽井沢で止める決意をするまでに、松村謙三さんとか大野伴睦さんとか、そのクラスの人が本当に膝詰めに出ちやだめだと説得するんですよ。今はああいう人もいないし、そこで、それじゃやめますというの

もやはり相当な勇氣ですよね。

僕が離党するときに、本当に心から止めてくれたのは、一人は松野頼三さん、もう一人は三木武夫さんでした。この二人は本気で止めてくれた。

松野さんは本当に口説き上手だから、本心じゃないと思うけれど、三カ月待って、三カ月たってこの党がよくならなかったら俺も一緒に出てやるから、党改革と一緒にやれと松野さんには言われたね。松野さんは、ちょうどその前に例の党の綱領改正のときの政調会長で随分迷惑をかけ恩義があったから辛かったね。

それと三木さん、総理大臣だからね。夜中に三木さんの家に行つて、三木さんの隣に座つて膝をなでられながら説得されましたよ。今は懐かしい思い出ですね。

《自民党復党、宏池会へ》

○紅谷 昭和六十一年七月の衆参同日選挙で、自民党は大勝する一方で新自由クラブは六議席に減らし、十年間の新自由クラブの活動に幕が下ろされました。自民党に復党されて再スタートされますが、先生は、当選されてからしばらくは派閥に入らないで、半年後に宮沢派に入られました。

当選された六人のうち、先生と鈴木恒夫さんは宮沢派で、山口さん、甘利さん、小杉さんの三人は中曽根派に入れ、田川先生は復党されないと分かれました。いろいろな経緯があつたのかと思ひますが、事情をお聞かせ願ひたいと思ひます。

○河野 少しだけ補足をします。

昭和五十八年に中曽根内閣になって連立を組むんです。田川さんが入閣して、その次に山口さんが入閣するんだけど、その頃から自民党復党の動きが非常に強くなってくる。自民党からも呼びかけが

あるし、新自由クラブの中にも、そろそろ自民党へ行つていいんじゃないかという声が出始めてきた。

その頃に、中曽根総理のヨーロッパ訪問があつて、中曽根さんから僕と一緒にいかないかと直接声がかつたんです。同行議員として七、八人行きましたかね。小渕さんが同行議員の団長で、綿貫さんや山東さんも行きました。僕はあまり行きたくないと言つたけど、山口さんなんかはどうしても行けというので連れていかれた。パリでパリ祭のパレードを見たりした数日後に、中曽根さんから、ちょっと二人で話をしようじゃないかと呼ばれ、いよいよ来たなと思つて部屋へ行つたら、こういうことを言つたんです。

中曽根さんは、私がミッテラン大統領と隣同士に座つてパレードを見ていたのを見たかと言うから、見ましたよと。君ね、ミッテランという人は社会党の人だけど、今は考え方もやや保守に変わつて大統領になった。ああいうふう人間は変わらなきゃだめなんだ。世の中も変わるんだから君も変わらなきゃだめだと盛んに言う一幕があつたんです。復党の直接的な呼びかけがあつたのはそのときです。

もう一回は、内閣改造で今度は河野が入るといふときに官邸に呼ばれ、中曽根、金丸の二人がいて、次は河野君に入閣してもらおうつもりだけれども復党が条件だ、今すぐじゃなくてもいいけれども復党の約束をしたら入閣だ。それで、冗談じゃないと喧嘩になつて、それなら、連立を解消しましょうと言って帰つてきてしまった。

そうしたら、牛尾さんを通じて、あの話はなかったことに改めて入閣要請するから入つてくれと、それが二回目の勧誘でした。

入閣して次の選挙になつて、自民党が大勝して連立は解消することになるんです。そこで、牛尾さんと浅利さんを通して、あれこれ言わずに戻つた方がいいという話になつて戻るわけです。

自民党に戻つて今度はどこの派閥に入るかという話になつたけれ